沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 31 集

沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地内の遺跡（Ⅰ）

－埋蔵文化財予備調査（表面踏査）報告－

2005 年（平成 17）5 月

沖 縄 県 立 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序　文

本報告書は、沖縄県恩納村における沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設計画に伴い、平成16年度に文部科学省より委託を受けて実施した埋蔵文化財予備調査（表面踏査）の成果をまとめたものです。

建設予定地は恩納村字谷茶と南恩納にまたがり、保養施設の旧白雲荘が所在した美しい海岸をもつ海側と、多くの尾根が延び、清らかな沢が流れる自然豊かな丘陵部に分かれ、総面積は222.1haを有しています。今回の表面踏査はその内約124.4haの範囲にわたって実施し、多数の遺構を確認しました。

特に多く確認されたものに炭焼窯があり、すべて丘陵間に流れる沢沿いのすぐ脇や斜面で見つかりました。また、尾根筋から尾根筋へと連続で繋ぐように構築された総延長800 m以上に及ぶ長大な猪垣とそれに付随する落とし穴も注目されます。これらは畑地などを猪の被害から守るために構築されたものと考えられます。さらに、丘陵の斜面を削平して平坦面を作る遺構も多数確認され、中には段々畑のように何段も平坦面を作っているものや1段の平坦面を区画したもの、石積みを構築したものなどがあります。これらの性格を判断するのは難しいのですが、作業場や段々畑、古道と言った用途が考えられるのではないでしょうか。その他、畑跡と考えられる畝状遺構や溝状遺構、古墓等が確認されました。希少な例として海岸付近の沖積地沿いに延びる尾根の先端部ではグスクと考えられる遺構が発見されました。

このように、今回の調査の成果は恩納村の丘陵部における生産活動の一端を垣間見せてくれる重要なものとなりました。また、平成17年度に計画している試掘調査の参考資料とするとともに、今後計画されている沖縄科学技術大学院大学（仮称）の建設から埋蔵文化財を適切に保護するため役立てたいと思います。

本報告書が多くの方々に活用されますとともに、埋蔵文化財の保護と活用について関心を持っていただければ幸いに存じます。

末尾ながら、現地調査及び資料整理にあたり、御指導・御助言を賜りました諸先生、地元の方々、並びに事業の実施にあたり御協力を賜りました関係各位に深く感謝申し上げます。

2005（平成17）年　5月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所　長　　田　場　　清　志

巻頭図版１　沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地全景（航空写真）

炭焼窯（30 地点）

炭焼窯煙道（58 地点）

巻頭図版 2

猪垣（37 地点）

平坦面（28 地点）

巻頭図版 3

畝状遺構（52 地点）

石列遺構（56 地点）

巻頭図版４

掘り切り状遺構（31 地点）

グスク遠景（41 地点）

巻頭図版 5

例　言

1．　本報告書は平成 16 年度に文部科学省からの受託事業として、沖縄県教育委員会が調査主体となり、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地内における埋蔵文化財予備調査（表面踏査）の成果をまとめたものである。

2．　調査対象地は沖縄県恩納村字南恩納及び谷茶にまたがる。

3．　現地調査は平成 17 年２月１日～５月 20 日まで、資料整理作業は平成 17 年２月１日～５月 31 日まで実施した。

4．　事業の実施にあたっては恩納村役場沖縄科学技術大学院大学推進班・恩納村教育委員会・恩納村谷茶区長・恩納村南恩納区長の協力を得た。また、調査範囲内において注意すべき貴重種の存在やその分布域に関しては、沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地内の環境調査を実施した日本工営株式会社・株式会社イーエーシー共同体に情報を提供していただいた。

5．　現地調査の実施にあたっては次の方々から貴重な助言をいただいた。記して感謝申し上げます。

遺構確認・・・・・・・當眞　嗣一（グスク研究所）

久米島炭焼窯案内・・・保久村昌欣（久米島自然文化センター）

聞取調査・・・・・・・大上　直美（南恩納誌専任編集委員）

6．　本報告書で使用した航空写真及び地形測量図は、平成 15 年度に実施された沖縄科学技術大学院大学（仮称）用地測量調査で作成されたものである。

7．　本報告書で使用した表紙及び巻頭図版１、P.7 の航空写真は航空自衛隊恩納分屯基地が所在するため、一部加筆している。

8．　本報告書は片桐千亜紀が編集し、崎原恒寿、比嘉尚輝、宮平真由美、玉城恵美利の協力を得た。執筆分担は下記のとおりである。

片桐　千亜紀　（第１章、第２章第１節、第３章、第４章、第５章）

崎原　恒寿　　（第２章第２節）

9．　現地調査で得られた遺物及び実測図・写真・画像デジタルデータ・地形測量図等の各種調査記録はすべて沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

目　次

序文
巻頭図版
例言

第１章　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　第２節　調査体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
　第３節　調査経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

第２章　位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
　第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

第３章　調査計画と方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
　第１節　調査計画・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
　第２節　調査方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

第４章　調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
　第１節　遺構の分布状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
　第２節　遺構の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
　　　１．炭焼窯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
　　　２．猪垣・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
　　　３．落とし穴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
　　　４．平坦面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
　　　５．畝状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
　　　６．マウンド状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
　　　７．石列遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
　　　８．堀り切り状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
　　　９．テーブル珊瑚集積・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
　　　10．石積遺構　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
　　　11．溝状遺構　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
　　　12．グスク　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
　　　13．古墓　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42

第５章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45

引用・参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47

報告書抄録

図　目　次

第１図　沖縄本島の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
第２図　恩納村の位置および大学院大学建設予定地の位置・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第３図　恩納村の文化財・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
第４図　予備調査における全体計画のフローチャート・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
第５図　踏査対象地区におけるグリッド設定図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
第６図　C 地区分布状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
第７図　B 地区分布状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
第８図　猪垣の撮影地点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
第９図　階段状平坦面平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

図　版　目　次

巻頭図版１　沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地全景（航空写真）
巻頭図版２　上段：炭焼窯（30 地点）
下段：炭焼窯煙道（58 地点）
巻頭図版３　上段：猪垣（37 地点）
下段：平坦面（28 地点）
巻頭図版４　上段：畝状遺構（52 地点）
下段：石列遺構（56 地点）
巻頭図版５　上段：掘り切り状遺構（31 地点）
下段：グスク遠景（41 地点）

図版 1　大学院大学予定地と調査範囲 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
図版 2　マーキング作業風景 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
図版 3　測量に使用した GPS ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
図版 4　森林内での測量風景 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
図版 5　B 地区遺構分布状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
図版 6　炭焼窯（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
図版 7　炭焼窯（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
図版 8　炭焼窯（３） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
図版 9　炭焼窯（４） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
図版 10　炭焼窯（５） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
図版 11　炭焼窯（６） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
図版 12　猪垣（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
図版 13　猪垣（２） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
図版 14　猪垣（３） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
図版 15　猪垣（４） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
図版 16　猪垣（５） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
図版 17　落とし穴（１） ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30

図版 18　落とし穴（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
図版 19　落とし穴（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
図版 20　階段状平坦面（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
図版 21　階段状平坦面（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
図版 22　平坦面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
図版 23　畝状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
図版 24　マウンド状遺構、石列遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
図版 25　石列遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
図版 26　堀り切り状遺構、テーブル珊瑚集積、石積遺構・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
図版 27　溝状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
図版 28　グスク、古墓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42

表　目　次

第１表　全体工程表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第２表　炭焼窯観察一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
第３表　各地点座標一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43

第１章　調査に至る経緯

第１節　調査に至る経緯

今回の業務は沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地内における埋蔵文化財の分布を把握するための調査である。表面踏査・試掘調査によって遺跡の詳細な分布状況と性格を明らかにし、予定されている沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設計画を円滑に進めようとするものである。

2001 年６月、内閣府沖縄担当相によって世界最高水準の自然科学系の大学院大学設置構想が公表された。2002 年、沖縄県知事によって設置された候補地推薦検討会は 12 市町村 13 ヵ所の候補地から、糸満市、北中城村、恩納村の３候補地を選定した。2003 年１月・２月、細田沖縄相と構想検討会委員が３候補地を視察、その後、専門家チームによる現地詳細調査が行われ、検討が続けられた。同年４月、大学院大学設置促進県民会議が県民フォーラムを開催。これらを受け、内閣府は沖縄科学技術大学院大学（仮称）の建設予定地を恩納村谷茶･南恩納地区に決定した。建設予定地は総面積が 222.1ha､琉球松などの森林に囲まれた谷茶･南恩納にまたがる丘陵部の地区と、南恩納の美しいビーチに面した海岸沿いの地区に分かれている。それぞれ213.4ha と8.7ha の面積があり､その大部分が村有地と公有地である｡地元では沖縄科学技術大学院大学(仮称）を核とした地域振興とともに、次代を担う子供達に夢を与え、人材育成につながることを大きく期待している。

2003 年９月、沖縄県立埋蔵文化財センター・沖縄県教育庁文化課・沖縄県企画開発部科学学術振興室大学院大学設置推進班の３者で今後のスケジュールと調査範囲について調整を行った。大きな問題となったのは調査範囲であった。建設予定地総面積が約 222.1ha と広大なため、予定地すべてについて予備調査を実施すると長期的な年月と費用を必要とし、今後の大学院大学建設計画に大きな障害をもたらすからである。これについて検討した結果、予定地の中でもさらに造成工事や建設に係る地域を重点的に絞り込んで予備調査を実施することとした。また、調査日程についても問題があった。平成 16 年度中に予備調査を完了してほしいとのことであったが、この時期はすでに沖縄県立埋蔵文化財センターにおいては平成 16 年度の全体的な計画が確定しており、１年間で予備調査を完了させる人材を確保させることが困難であったからである。これについては年度を分けることで実施するよう要請し、今後の検討課題とした。

2004 年２月、さらに詳細な調査範囲や業務実施期間等について幾度かの調整を経て、平成 16 年度（2004 年）に表面踏査、平成 17 年度（2005 年）に試掘調査、計２ヶ年間にわたり予備調査を実施し、報告書に関してはそれぞれの年度毎に刊行することで合意した。

表面踏査の範囲は、平成 15 年度に実施された沖縄科学技術大学院大学（仮称）の基本計画策定に資する資料作成業務の検討結果として、開発しうる範囲約 80ha が示され、その周辺約 20ha を合わせた約 100ha とした。

2005 年１月５日､「沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地における埋蔵文化財予備調査（表面踏査）業務」委託契約を文部科学省と締結し、事業を開始した。

第２節　調査体制

表面踏査及び資料整理に係る業務は沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。調査体制は以下のとおりである。

平成 16 年度

事業主体	沖縄県教育委員会	教育長	山内　彰
事業所管	沖縄県立埋蔵文化財センター	所長	安里　嗣淳
事業総括	〃	副所長	赤嶺　正幸
事業事務	〃	庶務課長	赤嶺　正幸
	〃	庶務課主任	比嘉美佐子
調査実施	〃	調査課長	盛本　勲

調査担当	沖縄県立埋蔵文化財センター	調査課　専門員	片桐千亜紀
	〃	〃	比嘉　尚輝
	〃	文化財調査嘱託員	崎原　恒寿

資料整理作業員
　譜久里昌代、高野ひろみ、譜久村泰子、石嶺敏子
報告書作成協力者
　宮平真由美、玉城恵美利
業務委託「新大学院大学建設予定地内埋蔵文化財予備調査に伴う支援業務委託」

株式会社	中部日本鉱業研究所	調査員	井伊浩一郎
	〃	調査補助員	細川　俊之
	〃	〃	田所　人志

平成 17 年度

事業主体	沖縄県教育委員会	教育長	仲宗根用英
事業所管	沖縄県立埋蔵文化財センター	所長	田場　清志
事業総括	〃	副所長	赤嶺　正幸
調査事務	〃	庶務課長	赤嶺　正幸
	〃	庶務課　主査	城間奈津子
事業実施	〃	調査課長	岸本　義彦
事業担当	〃	調査課　専門員	片桐千亜紀
	〃	文化財調査嘱託員	崎原　恒寿

資料整理作業員
　石嶺敏子
報告書作成協力者
　宮平真由美、玉城恵美利、比嘉尚輝
業務委託「新大学院大学建設予定地内埋蔵文化財予備調査に伴う支援業務委託」

株式会社	中部日本鉱業研究所	調査員	井伊浩一郎
	〃	調査補助員	細川　俊之
	〃	〃	田所　人志

第３節　調査経過

当該事業は平成 16 年度に開始し、年度をまたいで平成 17 年５月 31 日に終了した。現地業務である表面踏査は平成 17 年２月１日～５月 20 日まで実施した。

平成 17 年１月５日、「沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地における埋蔵文化財予備調査（表面踏査）業務」委託を締結し、表面踏査を実施するための準備を開始した。１月 21 日、株式会社中部日本鉱業研究所と支援業務委託を締結した。

３ヶ月間の調査期間を前提に、広大な面積の調査区をどのように調査していくかについて中部日本鉱業研究所と検討を続け、調査方法やスケジュール、作業員の雇用、現場事務所の設置等がほぼ決まったのは１月下旬であった。

１月 26 日、内閣府・文部科学省・沖縄県教育委員会・恩納村教育委員会・関係業者との合同打ち合わせ会議が恩納村役場にて実施された。この会議では１年をかけて実施された環境調査の成果が発表された。その結果、埋蔵文化財予備調査範囲のほぼ全域にわたって貴重種が存在することを知った。この会議によって、貴重種を保護するため、現地踏査では伐採を行わない方法で調査することとなった。そのため、調査計画の見直しを行い、調査を概要踏査と詳細踏査に分けて実施することとした。これによって、概要踏査で草木の伐採が必要と判断された場合は、詳細踏査の前に重要な場所を植生の専門家に見てもらい、了解の上で伐採

を行えば保護することが可能となる。

２月１日、表面踏査開始。124.4ha の調査範囲を３地区に分割し、海側を A 地区（旧白雲荘周辺、約 4.2ha）、山側を B 地区（開発検討ゾーン北側、約 65.7ha）と C 地区（開発検討ゾーン南側、約 54.5ha）に分割した（図版１）。

２月上旬は A 地区の概要踏査を中心に実施した。海岸線において沖縄産陶器の散布を確認したが、全体としては明瞭な遺構が確認できなかったため詳細踏査を割愛し、平成 17 年度に計画している試掘調査で再度遺跡の確認を行うこととした。

２月中旬より B 地区の概要踏査を開始した。まず、地形図で確認できる沢筋を踏査することとした。沢筋では主に炭焼窯が次々と確認された。また、地域が限定されるが斜面を削り出して平坦面を形成している遺構も確認された。この遺構にはテーブル珊瑚やシャコ貝などが散布している状況も見られた。

次は尾根筋の調査である。尾根筋は草木が生い茂り歩くのも困難であった。伐採をしない調査のため、草木はすべて手で分けながら進まなければならなかった。地形の改変と遺跡が存在しそうな平場に注意しながら慎重に踏査を行った。地形図で予想した平場は実際に踏査してみると狭い場所がほとんどであり、地形は急な斜面と細い尾根が連なる地域であった。ここでは畝状の地形や猪垣、落とし穴等が確認された。ほぼ１ヶ月をかけて B 地区の概要踏査を終えた。

C 地区の概要踏査は B 地区の概要踏査をほぼ終わろうとした頃、同時並行で始めた。B 地区と同様沢筋の調査から始めたが、驚いたことに B 地区で次々と確認された炭焼窯はまったく確認されず、地形の改変等の遺構も確認できなかった。尾根筋でも同様に畝状の遺構や猪垣等も確認できなかった。唯一確認できた遺構は明らかに人間の手によって掘られた横穴だけであった。

３月中旬から B 地区の詳細踏査を開始した。詳細踏査では概要踏査で確認された遺構の周辺やその立地と近い場所を重点的に実施した。地形図では確認できなかった小さな沢筋では新しく確認された炭焼窯もあった。尾根筋で確認された平場や畝状遺構では遺物の確認をするため、広範囲にわたって落ち葉拾いを中心とした清掃を実施した。詳細踏査によってさらに多数の遺構が確認されたため、急いでこれらの地点の写真・座標記録をとることが必要となった。一度に多くの荷物を持って移動しながら遺構地点に行くことは困難だったため、写真記録班と GPS 測量班に分割し記録を進めた。５月中旬に B 地区で確認されたすべての地点の写真記録と座標記録をとり詳細踏査を終了させた。

C 地区の詳細踏査は B 地区と平行で４月中旬から開始した。概要踏査で確認された横穴を中心として周辺を実施したが、明瞭な遺構は確認できなかった。横穴の写真記録と座標記録をとり、４月下旬に詳細踏査を終了させた。

５月中旬に A 地区～ C 地区までの表面踏査を終了させ、現地調査を終えた。平成 17 年度は今回の成果を基に試掘調査を実施する予定である。そのため、５月後半は断続的に現地に赴き試掘調査のための、準備を実施した。

資料整理は、調査によって蓄積されていく各遺構の座標データやデジタル・白黒・スライド写真の管理台帳を随時作成することから始めた。台帳は最終的に発見した遺構（地点）ごとに１地点から 62 地点まで順番にまとめた。また、遺構の地点ナンバーとは別に、通しナンバーを付け管理している。

各遺構の座標データは GIS を利用して地形図上にプロットし、オルソ補正した航空写真とも重ねて場所の確認ができるようにした。報告書で使用した遺構の分布状況等の図版はこのデータを基に作成した。

第１表　全体工程表

内　容	１月			２月			３月			４月			５月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
計画準備	諸調整等調査準備 →														
A 地区（海側検討ゾーン周辺）	一月五日契約締結		一月二六日合同打ち合わせ	概要踏査 →											
B 地区（北尾根検討ゾーン周辺）					概要踏査 →			詳細踏査、写真・座標記 →							
C 地区（南尾根検討ゾーン周辺）							概要踏査 →			詳細踏査、写真・座標記 →					
資料整理・報告書作成													資料整理・報告書刊行 →		

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地が所在する恩納村は沖縄本島のほぼ中央部西海岸に位置し、海岸部と河川や湧水が豊な丘陵部によって成り立っている。西側は東シナ海に面し、東側は恩納岳を中心に北から漢那岳・熱田岳・ブート岳・屋嘉岳・石川岳等の山々が広がり、さらにこれらの山々を源流とする川や沢が谷間を流れ出ている。特に、白い砂浜と澄んだ海水、美しい珊瑚礁によって形成された長大な恩納村の海岸線はすべて沖縄海洋国定公園に指定されており、スキューバダイビングなどマリンスポーツのメッカとして有名である。珊瑚礁の広がる美しい海岸線が観光資源となっており、高級なリゾートホテルが競って並び立ち、毎年何万人もの観光客が沖縄のイメージともなっている南国の雰囲気と美しい海を求めてやってくる。このように、恩納村は山や川、海などの変化に富んだ自然豊かな村であり、また、観光立県沖縄の姿を象徴する代表的な村ともいえる。

村の総面積は 50.79 平方キロメートルで、本部町に次いで県下 10 番目の大きさとなっており、南北に 27.4km、東西に 4.2km と細長い形をしている。北に名護市、東に宜野座村・金武町・うるま市 (旧石川市)、南に沖縄市・読谷村と多くの市町村と隣接しており、うるま市と隣接する部分は東西で沖縄本島のもっとも狭い地域となっている。県庁所在地である那覇市までは約 50km、北部の中心地名護市までは約 25km で、本島北部と中南部の結節地点となっている。村の人口は約 1 万人、山間地に喜瀬武原区がある他は、国道 58 号線及び県道 6 号線沿いの沿岸部に 14 の集落が点在する。

地形や地質は中南部地域とは大きく異なる。中南部は平坦な台地や緩やかな丘陵が広がり、地質は島尻マージと呼ばれる泥岩や琉球石灰岩がその基盤となっているが、恩納村に入るとほとんどが山岳と樹林によって占められ、地質も中生代の粘板岩や砂岩などの名護層や嘉陽層といわれる地層によって占められる。このような地層の上には国頭礫層が海岸近い山地に分布している。これら、中生層と国頭礫層から風化してできた土壌は、赤土の強酸性土をなしている。

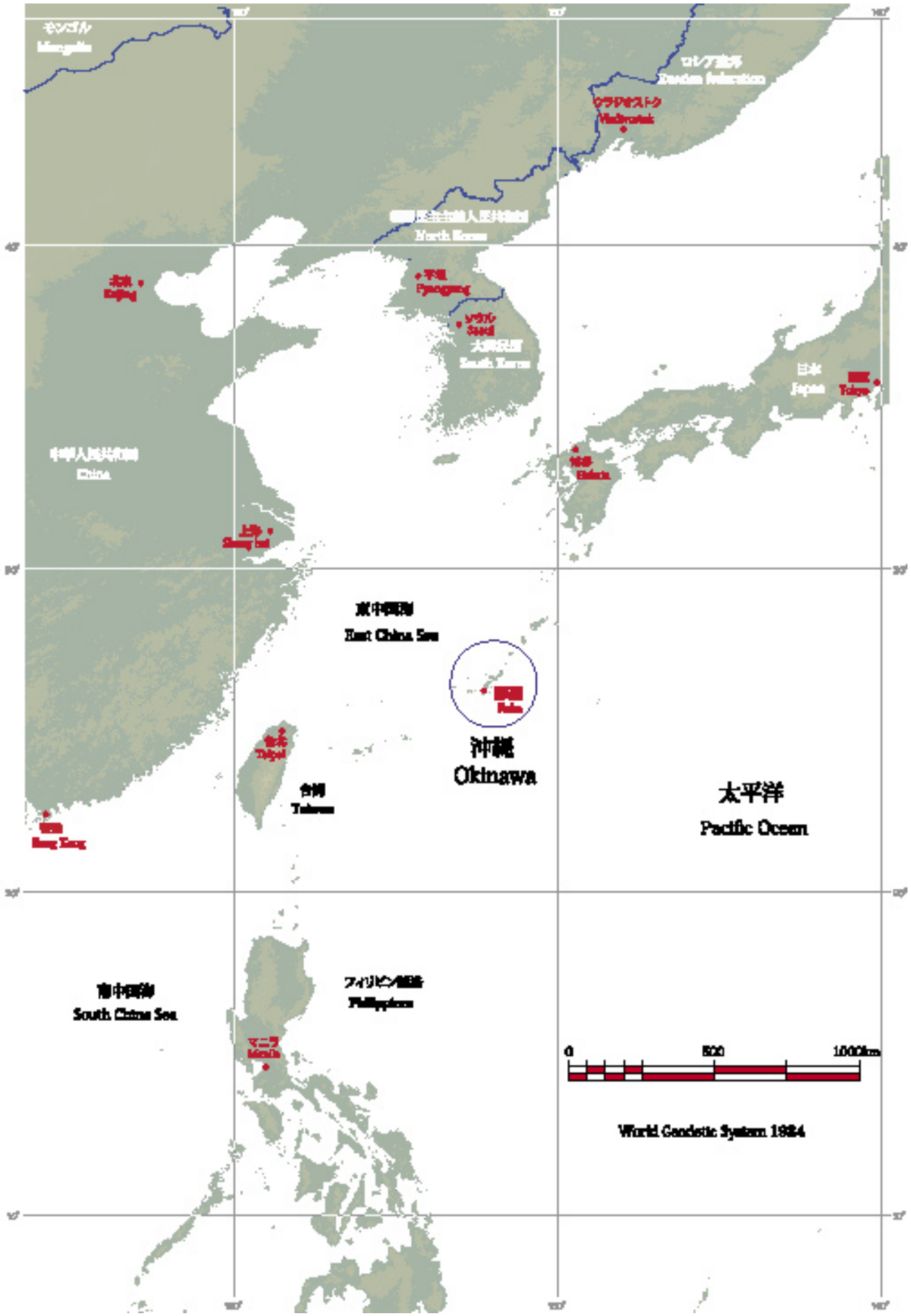
中南部のいたるところに見られる琉球石灰岩は、多幸山からは急に少なくなり、真栄田岬・前兼久・野原・万座毛・瀬良垣ビーチ周辺等の海岸付近にほぼ限られるようになる。内陸には安富祖の坊主ガマにわずかに見られるのみである（仲松 1980）。

沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地は恩納村の字南恩納・谷茶にまたがって所在する。建設予定地の総面積は 222.1ha で、琉球松などの森林に囲まれた丘陵部の地区と海岸沿いの地区に分かれている。丘陵部の地区は面積 213.4ha で平坦部がほとんどなく、すべて尾根と谷で構成される。海岸沿いの地区は面積 8.7ha で美しいビーチに面しており、旧白雲荘が所在した場所である。

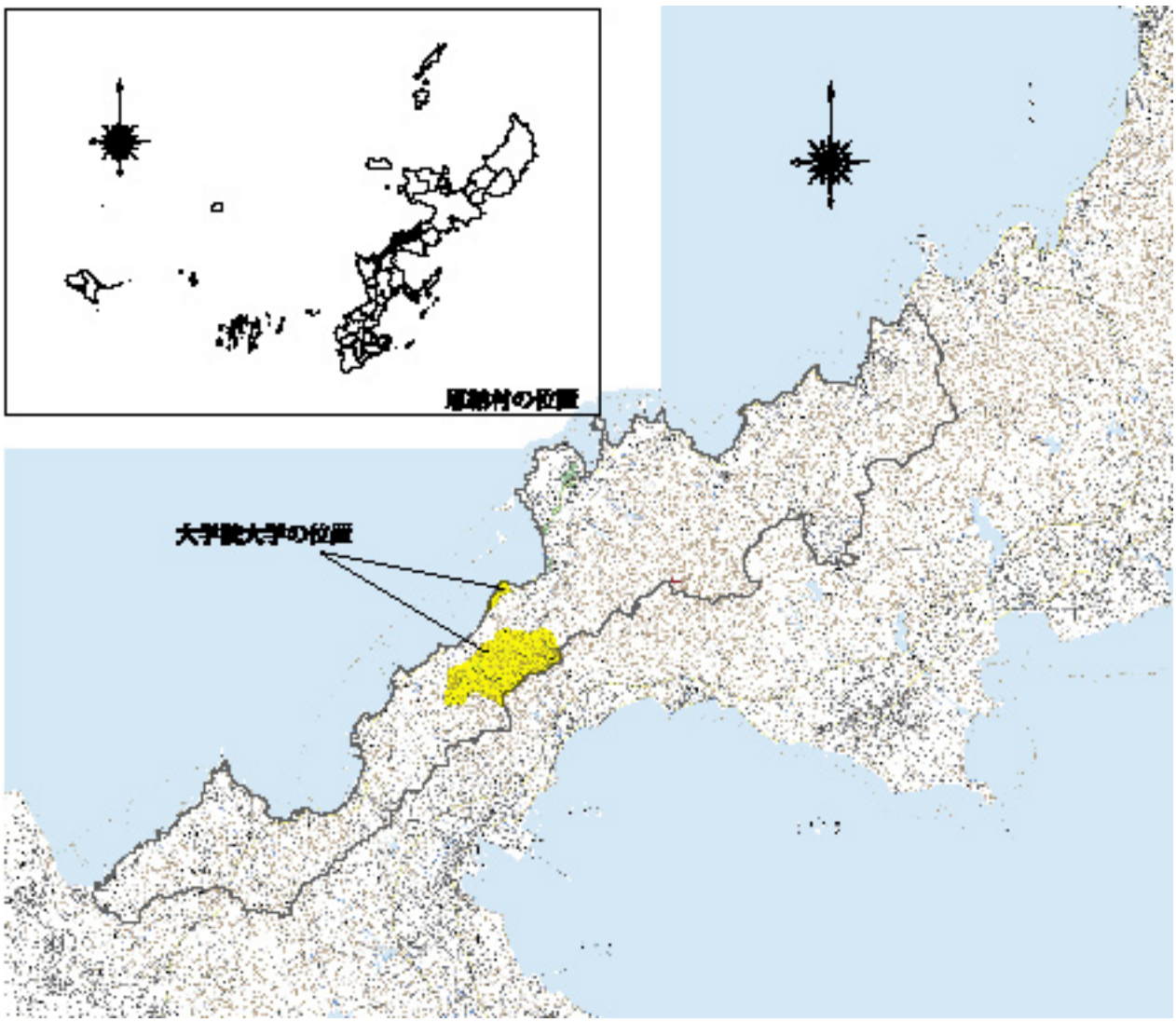
大部分を占める丘陵部は多くの小川が流れており、それらが収束し何本かの支流となって海岸に流れ出し、いくつかの沖積地をつくりだしている。また、尾根筋が細く谷に向かって急な傾斜をもつ尾根が乱立している。面積のほとんどが村有地となっており、村の苗畑等がある。予定地周辺には村立の赤間運動場があり、近年、改築されて平成 16 年は韓国プロ野球のキャンプにおける練習場ともなっていた。また、予定地の眼前に広がる海とその砂丘はかの有名な「谷茶前の浜」である。まさに、沖縄科学技術大学院大学 (仮称) はすばらしい景観と自然を持つ絶好の場所に建設される予定と言える。

仲松弥秀氏は言う「海は現在でも目の前にある。しかし、この海は以前の海とは違った海となっている。山林が荒れるにつれ、戦後の山地開墾方法のまずさによって、赤土泥水が川や溝はもちろんのこと、それが海へと流れ込んできた。かくして海の水はよごれ、かつ泥が堆積して浜の方からしだいに浅くなってきた。大正初めまでは、浜辺近くに山原船が着いたのであったが、今では小船さえ着けることができなくなっている。・・・（中略）。恩納の海はしだいに枯れてきている。山林を大切にし、海を大切にしなかったら、県下に誇る恩納村の美景もついには枯れてしまうのではなかろうか（仲松 1980）。」と。

建設予定地内には貴重な植生も豊富に生息していることから、表面踏査では伐採は行わずに遺構の確認をし、記録する方法をとった。また、丘陵部には猪が生息しており、調査中遭遇することはなかったが、鳴き声や土を掘り返した痕等がよく目に付いた。沖縄科学技術大学院大学（仮称）がこのように美しい村の自然環境を充分考慮して建設されることを願う。


East China Sea
沖縄
Okinawa
太平洋
Pacific Ocean
South China Sea
0
500
1000km
World Geodetic System 1984

第１図　沖縄本島の位置



第２図　恩納村の位置および大学院大学建設予定地の位置

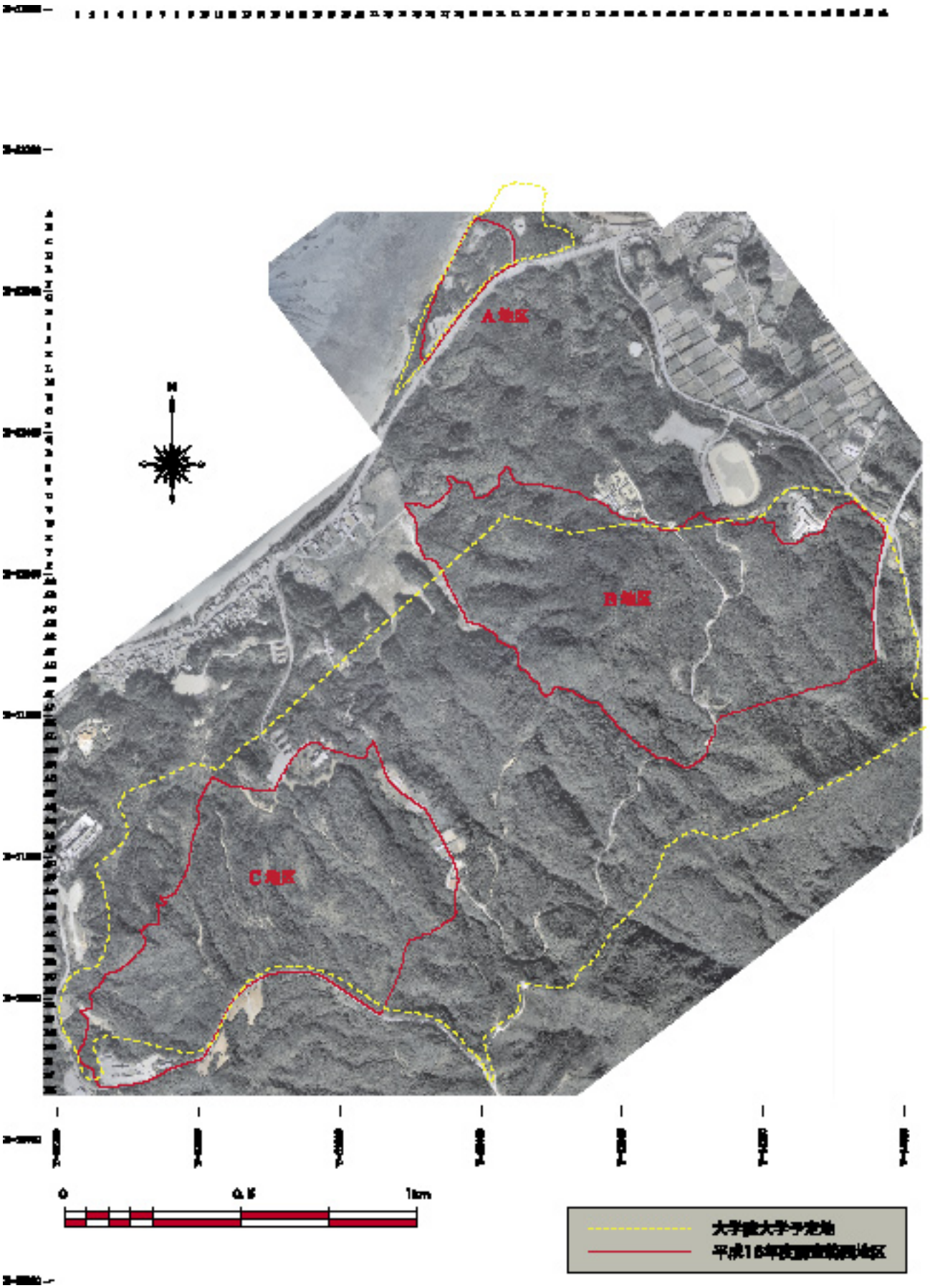
第２節　歴史的環境

恩納村の歴史は、今から約 3500 年前に遡ることができる。この地域には、現在までに 47 遺跡が確認されている。考古学上の調査成果から、貝塚時代前期～後期（縄文時代～古墳時代）、グスク時代（中世）～現代に至るまで人間活動の場となっていたことがわかっている。

縄文時代相当期の遺跡では、国指定の仲泊遺跡や伊武部貝塚などがある。仲泊遺跡は貝塚時代前期（縄文時代後期）に位置づけられる伊波式、仲泊式土器などといった土器群と奄美との関連性のある土器群が確認されている。沖縄国際海洋博覧会にむけた国道 58 号線の改良工事のため、1974 年に実施された緊急発掘調査時によって、当遺跡の重要性が確認され遺跡保存の活動が強まり、国道 58 号線を迂回させたことは、まだ、記憶に残っていることだと思われる。緊急調査というと 1970 ～ 80 年代にかけて、道路拡幅・改修工事に係わる緊急調査が数件行われている。調査した遺跡の中では縄文時代相当期の遺跡は少なく、大部分がそれ以降の遺跡である。

それらの調査の中に、縄文～古墳時代相当期まで継続して人々の生活の舞台となっていた伊武部貝塚などがある。伊武部貝塚は多和田真淳、高宮広衛氏の報告によって知られるようになった。当遺跡は砂丘地に位置しており、縄文～古墳時代相当期の土器、石器、貝・骨製品が出土している。遺構では、土壙集積、石敷集積、集積炉などが確認されている。

後続の弥生～古墳時代相当期では、熱田第二貝塚、久良波貝塚、熱田貝塚などが発見されており、そのほとんどが貝塚や集落跡である。久良波貝塚は、1990・1992 年に緊急調査がなされており、くびれ平底を主



図版１　大学院大学予定地と調査範囲

体とする後期土器群が出土している。先史時代の遺構は確認されていないが、92 年の調査では製糖所の炉跡が 2 基確認されている。

グスク時代（中世）から近世にかけての遺跡は、グスク、墓域、集落跡が確認されており、その中に護佐丸の居城としての山田グスクが知られている。山田グスクは字山田の東側にそびえる石灰岩台地の先端部に位置し、標高 95m の要害の地に築かれたグスクである。また、グスク北面の崖下に護佐丸先祖の墓がある。グスクの石積みは野面積みを使用しており、グスク系土器や輸入陶磁器等が出土している。グスクの北側谷間には、山田の古島があったといわれており、屋敷跡や古井戸がわずかに現存している。伝承によると山田グスク前にある久良波海岸は当時の貿易港として華やいだところだとされている。

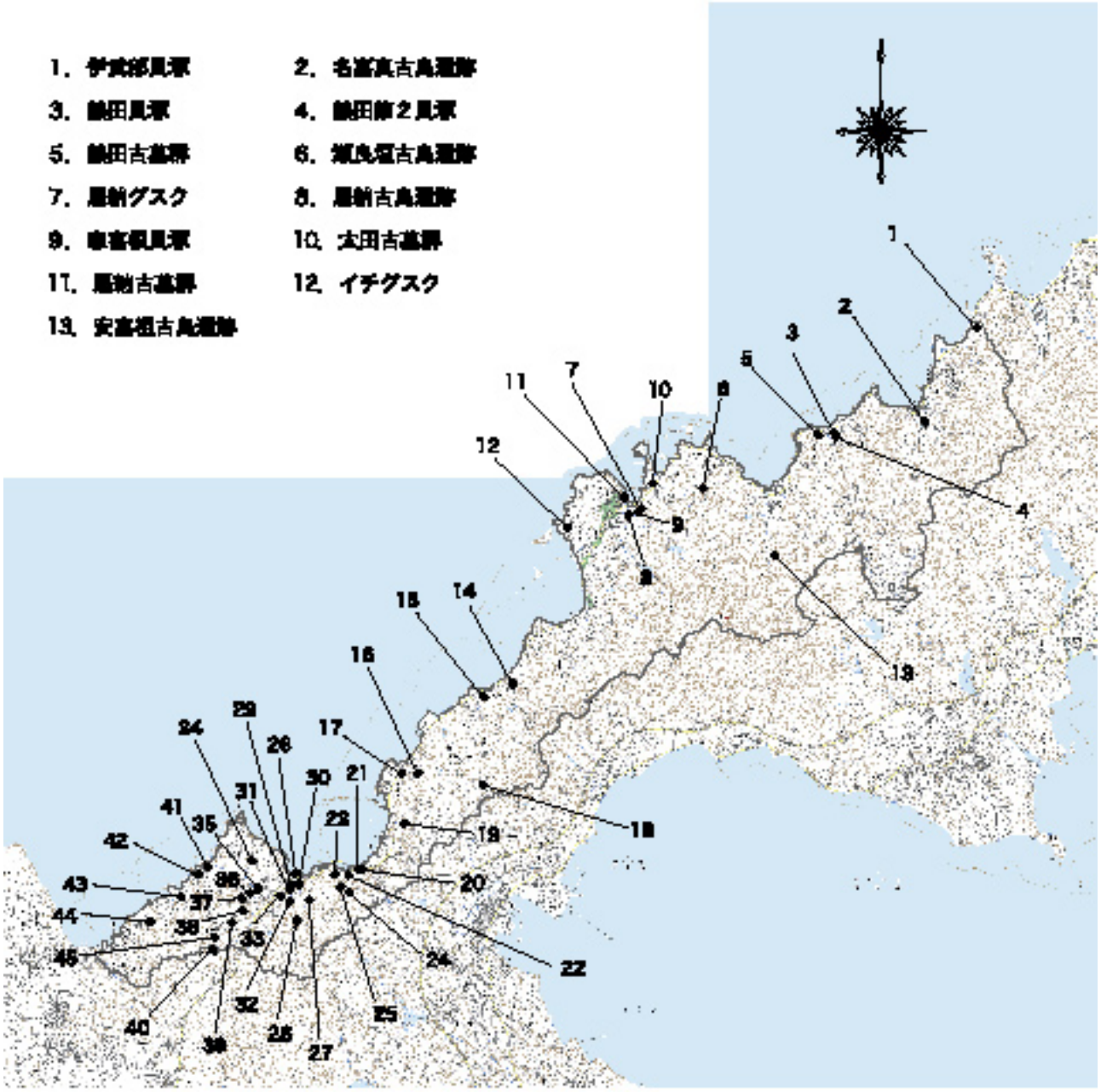
港と関連することとして、グスク下方の井戸「メーガー」から中国の貿易船に使用されていたと考えられる木碇の一部である碇石が発見されており、恩納村近海に外国船が往来していたことを裏付ける資料となっている。

以後の近世～近代にかけては、生産遺跡として伝山田窯跡や字赤間の炭焼窯などを使用していたことが知られている。沿岸部においては、字真栄田の石切り場などが発見されている。

このような経過を踏んで現在の「恩納村」ができたのは、明治 41（1908）年によって制定された法律によってである。それ以前は、「恩納間切」と呼ばれていた。開始期は不明だが、「恩納村」ができた前後の大正初年頃まで恩納村では豊富な山の資源を利用し、木材や薪、竹、竹竿などを山原船によって那覇方面に運送しており、那覇方面からは酒、布類、灯油やその他の雑貨品が山原船で運搬されていた。

今回の埋蔵文化財センターによる調査では、沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地である旧白雲荘周辺地区（A 地区）の海岸砂丘と赤間運動場裏手側にある丘陵の北・南地区（B・C 地区）の三地区が調査の対象となっている。

調査地区周辺には、隣の字谷茶に谷茶貝塚、谷茶古墓群などといった遺跡がある。谷茶貝塚は、部落の南西端側に位置し、砂丘から丘陵部の裾一帯まで広がっている。この貝塚は、貝塚時代後期の遺跡で土器片が表採されている。谷茶貝塚の北東に位置する谷茶古墓群は、国道 58 号線沿いの南東側に延びる丘陵の北東側斜面に掘り込み墓が点々とみられる。前面に広がる平地では新しい墓や建設中の墓などがあり、現在も墓域として利用されているようである。


1. 伊武部貝塚
2. 名倉真古墳群
3. 鮫田貝塚
4. 鮫田第２貝塚
5. 鮫田古墓群
6. 瀬良垣古墳群
7. 屋敷グスク
8. 屋敷古墳群
9. 車宮根貝塚
10. 太田古墓群
11. 屋敷古墓群
12. イチグスク
13. 安富祖古墳群
14. 岩茶古墓群
15. 岩茶貝塚
16. 宮城古墳群
17. 前兼久貝塚
18. 炭焼き窯
19. 安幸地原貝塚
20. 仲泊一番塚
21. 前の御嶽
22. 仲泊大金原土器製塩地
23. 仲泊遺跡、高麗人墓
24. 唐人墓の碑
25. 比屋根板石畳道
26. 久良波貝塚
27. 久良波首里殿内遺跡
28. 山田グスク＆勝佐丸父祖の墓
29. 旧久良波集落
30. アンナーグスク
31. 山田松川の石垣
32. 山田古墳遺跡
33. ムラウチ
34. ガジャグスク
35. 寺川垣
36. 伝山田城跡
37. 多幸山
38. フェーレー岩
39. 御主マーチ
40. 御待毛・殿内御宮
41. 屋慶貝塚
42. 屋慶集落内遺跡
43. 美留貝塚

第３図　恩納村の文化財

第３章　調査計画と方法

第１節　調査計画

本業務は沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設に係る埋蔵文化財予備調査である。当該地域は分布調査が実施されていないことから、まず、基本的な表面踏査を実施し、その成果を受けて試掘調査によって遺跡の存在の有無とその性格と範囲を把握する。それによって、建設による埋蔵文化財の不時発見、または破壊を避ける為の資料とする。

平成 16 年度は表面踏査を実施し、平成 17 年度は表面踏査の成果を基に試掘調査を実施する予定である。今回の調査では当該地域の自然環境の保護を十分考慮する必要があるため、綿密な計画を立てて実施する必要があった。基本的に伐採や枝打等は我々の判断では実施しない方針をとったため、詳細な測量や試掘調査を実施する際には植生等の知識を有する専門家に、伐採したい地域の植生チェックをしてもらい、その結果を検討して伐採をする計画を立てている。表面踏査では必要がなかったが、今後実施予定の試掘調査や遺構の詳細確認のためには伐採は避けて通れない。

予備調査における全体計画をフローチャートとしてまとめた（第４図）。

第２節　調査方法

沖縄科学技術大学院大学（仮称）の建設にあたっては、埋蔵文化財の保護と伴に環境への影響も充分考慮して設計を固める方針である。そのため、予備調査の段階である埋蔵文化財の分布調査でも、貴重種の損傷を抑えつつ実施する方が望ましいとの意見が提示された。これを受け、埋蔵文化財サイドと環境サイドにおいて活発な議論が展開され、予備調査の方法について見直しを図ることとなった。

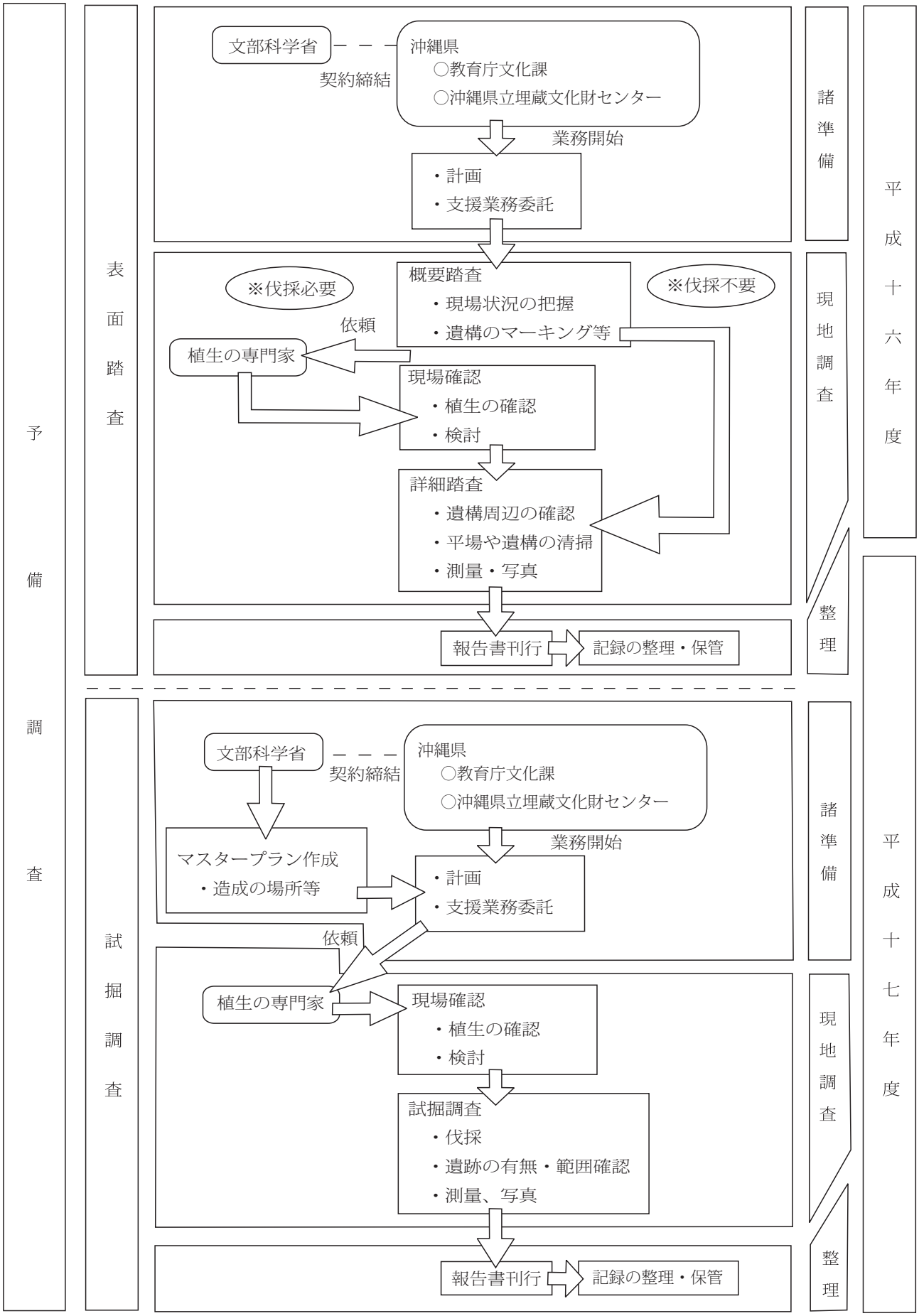
当初計画では A 地区から順次集中的に踏査を進め、遺構が確認された場所では伐採を行ないつつ測量等や写真記録を実施していく方針であった。しかし､我々では貴重種の判断が困難なため､その保護を考えた場合、測量や写真記録のための伐採ができない。また、伐採をするたびに専門家に依頼していると作業効率も極めて悪い。このことを打開するため、まず、概要的な踏査を全体的に実施し、重要な場所についてはさらに詳細な踏査を進める２段階の調査方法に変更した。この方法だと詳細な踏査においてやむなく伐採を必要とした場合は、まとめて専門家に助言をいただくことが可能となる。

踏査時に遺構が確認された場合は、地形図におおよその位置を記入、簡易の記録として 400 万画素程度のデジタルカメラで撮影を行い、黄色のレコード巻テープと地点番号を記入した耐水性のラベルを周囲にある樹木に括り付けた（図版２）。これらは、その後に行う詳細踏査や地点測量・写真撮影のための目印として活用した。

調査対象地点の測量は、踏査とは別に測量班を設け、踏査班の後を追う形で GPS やトータルステーションを用いて実施した。使用した GPS はニコン・トリンブル社の Trimble5800、受信機に携帯電話を接続して VRS-GPS サービスを活用することでリアルタイムに公共座標データを現場で確認することができるタイプにした（図版３）。しかしながら、調査対象地区は樹木の伐採等が行えないため、尾根付近でも 3.0 ～ 5.0m、沢付近では 10m 以上に達する木々の中での GPS の直接観測は現実的に不可能であった。そこで､本来約 2.0m の支柱の先に円盤状の受信機を備えた GPS に、直径３㎝・長さ 1.8m のスチール製棒を２～３本つなげて製作した新たな支柱を取り付け、樹上までのばすことで衛星情報を多く取り込み、通信を可能とすることができた（図版４）。この方法により尾根付近の測量は容易となったが、谷部分では GPS が樹上に達せず衛星情報を得ることは困難であった。そのため沢付近の測量は、まず調査対象地点が見通せる尾根上に GPS にて基準点を２箇所設置し、この２点を用いて尾根から沢への斜面上にトータルステーションを立てて、位置計測を行うこととした。草木や樹木により１回で見通せない箇所については、開放トラバースを組み、機械を移動しながら、尾根から斜面を下りつつ測量した。

調査地点の写真撮影は、35 ㎜カラー・白黒・スライドと 600 万画素程度のデジタルカメラにて行った。三脚等の撮影機材を一人で担いで山野を歩くのは、非常に困難なため調査員と作業員の２人からなる撮影班を設けて、調査の後半から踏査と測量が終わった地点を地点番号順に撮影した。

グリッドの設定は踏査対象地区の A 地区（旧白雲荘周辺）、B 地区（開発検討ゾーン北側）、C 地区（開発



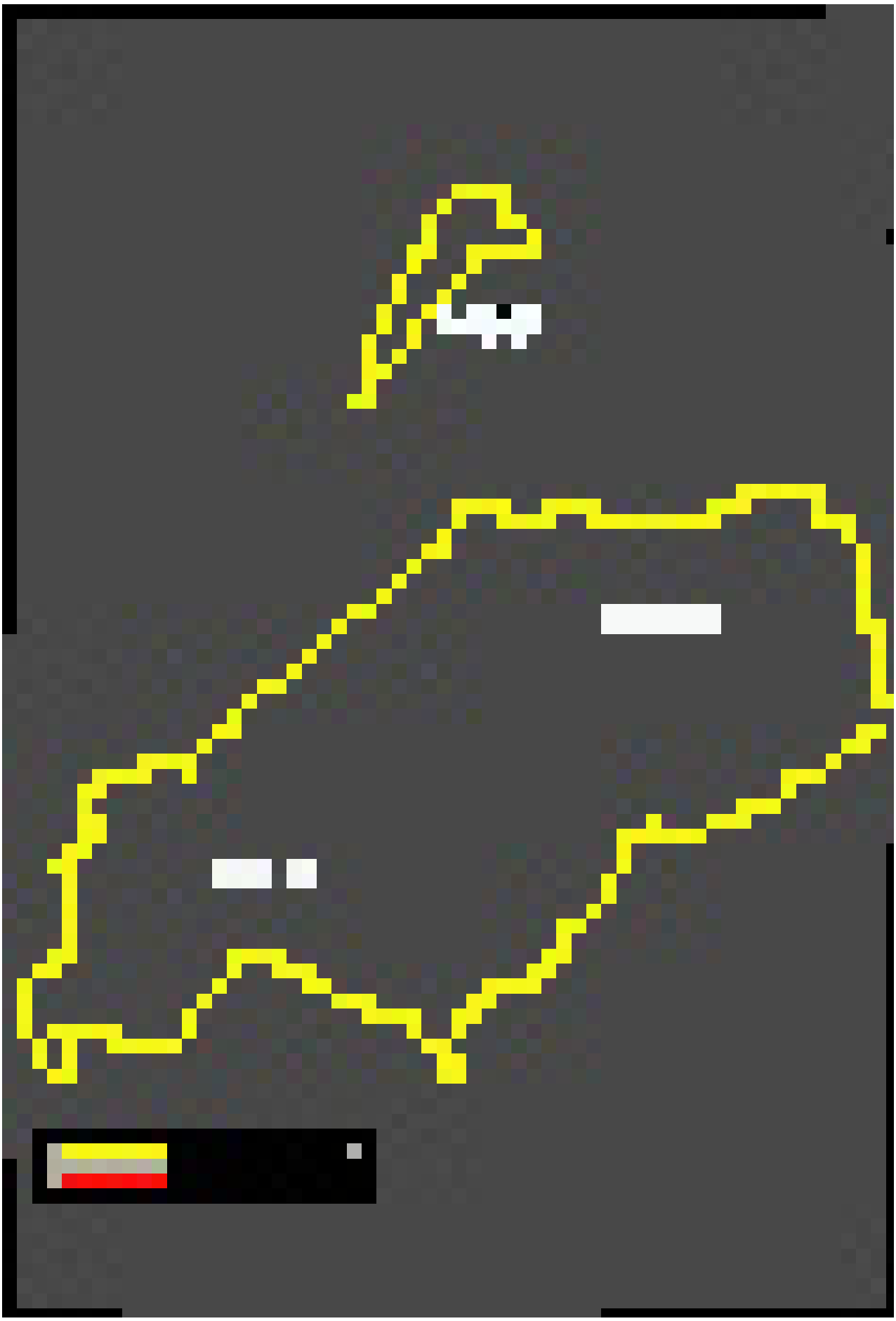
第４図　予備調査における全体計画のフローチャート

検討ゾーン南側）の３つをすべて含むよう座標値 X=53040、Y=32240 を基準として、40m メッシュを用いた。グリッドには東西方向に数字、南北方向にアルファベットを付し、各番号は北西杭の番号で呼称した。

図版３　測量に使用した GPS

図版２　マーキング作業風景

図版４　森林内での測量風景



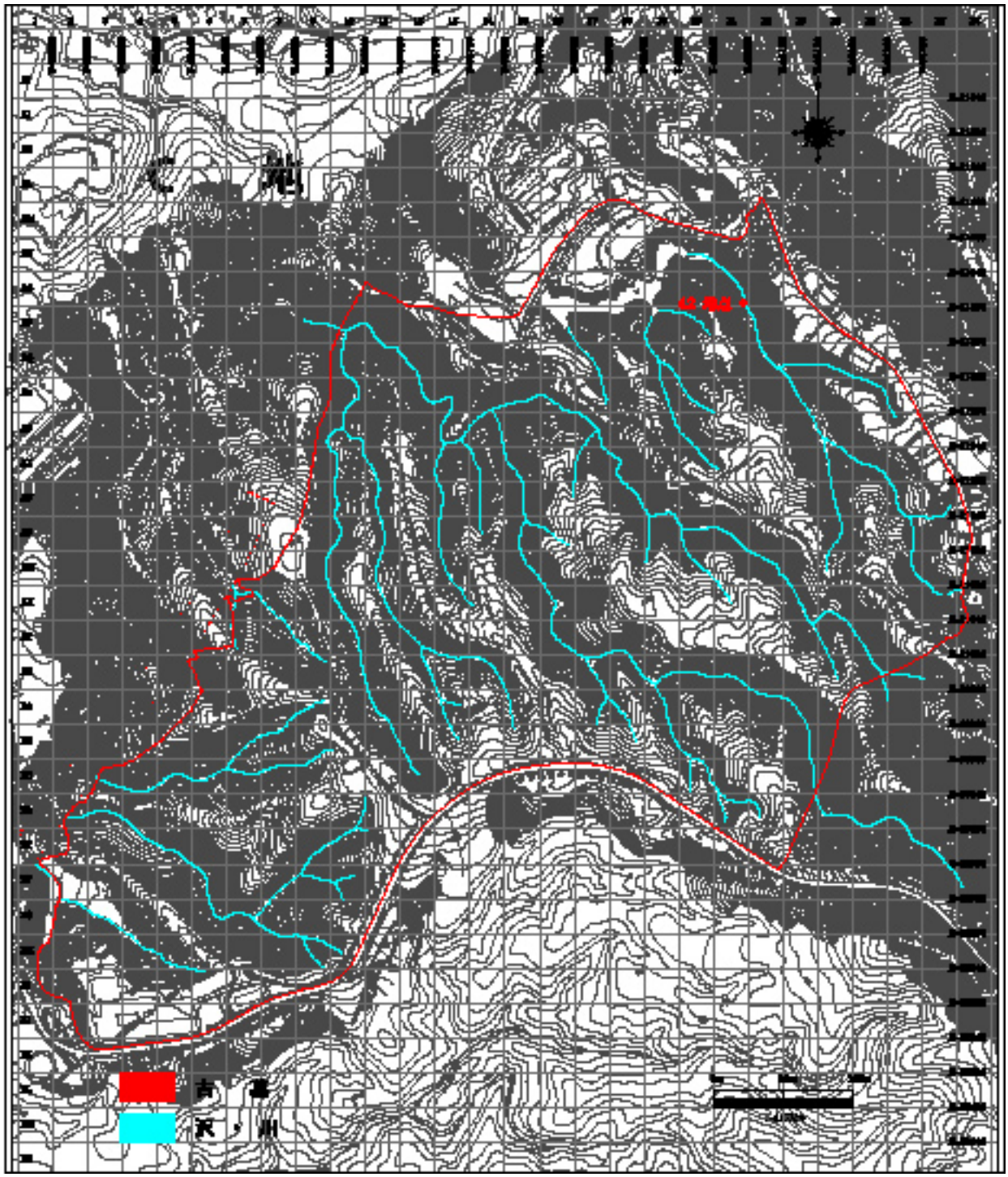
第５図　踏査対象地区におけるグリット設定図

第４章　調査の成果

第１節　遺構の分布状況

今回の調査では確認した遺構には「～地点」と通しナンバーを付けつつ調査を進めた。広範囲に渡る遺構が確認された場合も、同一地点として表現したため、その地点内にいくつかの性格を持つ遺構が混在する場合（例えば、33 地点には「階段状平坦面」と「落とし穴」が含まれ、32 地点には「猪垣」と「落とし穴」が含まれている）がある。したがって、確認した「地点の数」と「遺構の数」は一致しない。

今回の踏査において、猪垣３箇所、落とし穴９基、炭焼窯 34 基、階段状平坦面４箇所、平坦面７箇所、石列遺構２基、マウンド状遺構２基、畝状遺構２箇所、グスク１箇所、石積遺構１箇所、テーブル珊瑚集積１箇所、掘り切り状遺構１箇所、溝状遺構１箇所、古墓１基の合計 62 地点が確認された。



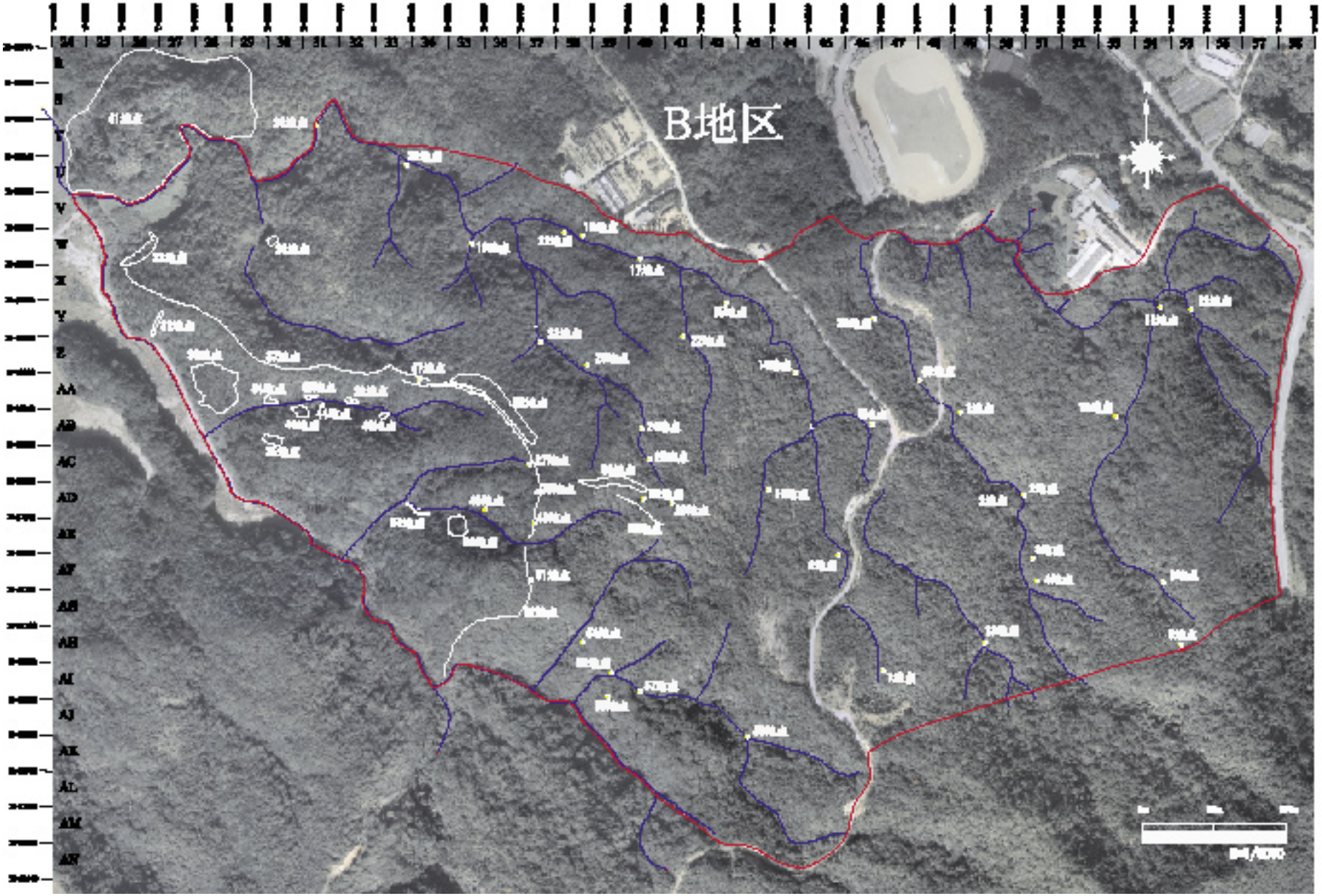
第６図　Ｃ地区分布状況

別保存（イラストラーター）

第７図　Ｂ地区分布状況

別保存（イラストラーター）

第７図　Ｂ地区分布状況



図版 5　B 地区遺構分布状況

第２節　遺構の概要

今回確認された遺構について、その概要を述べる。前節でも説明したが、同一地点内に複数の遺構が混在しているため、記述ではその性格によって分類して概観する。そのため、「階段状平坦面」とした 33 地点と「落とし穴」とした 33 地点等がある。

１. 炭焼窯 (図版６~11)

炭焼窯は、B 地区の広範囲にわたって合計 34 基確認された。沢沿いの斜面を切り土して平坦面を設け、窯体を築き、ものによっては一部石を用いて壁面補強している。構築場所としては、沢のすぐ脇、沢と尾根の傾斜面、沢のすぐ上の斜面等である。規模は最も大きいもので 440 × 300 ㎝を図り、最も小さいものは 210 × 150 ㎝を図ることから、ほぼ 1/4 となる。煙道は煙道出口がよく残存しており、全体の 4 割強で確認することができた。また、２箇所（９、22 地点）については、煙道入口も確認できた。焚口は 26 地点以外について幅を測った結果、最も幅が広いもので 70 ㎝、最も幅が狭いもので 15 ㎝であった。平均は約 40 ㎝ほどである。天井が完全に残っているものは確認されなかったが、17 地点で確認された窯はごく一部が残存していた。

窯体周囲には、窯体以外に作業空間かその他の目的で平坦面を作っているものもみられる。場所としては、窯体の前面が多く、沢の対岸、窯体の後方でも作られる。このような平坦面がないものは、周囲が自然の緩斜面や平坦な地形であることが多い。窯体のみでなく、周辺の地形も加工して作業場のように利用している場所も想定されることから、今後の調査で伐採や清掃作業により確認範囲を広げることでより詳細な性格が判明するものと思われる。

窯体内の形は平面の概観により洋ナシ形、扁平洋ナシ形、楕円形、三角形、方形等に分類されるが、詳細な調査や測量を実施していないため、細かい形状については今後の調査に委ねたい。

沖縄県教育委員会による生産遺跡分布調査によって炭焼窯の確認もされており、「恩納村赤間の炭焼窯跡」として調査されているもの（沖縄県教育委員会 1995）は、今回の調査による６地点の炭焼窯に該当すると思われる。

南恩納村誌専任編集委員の大上直美氏からの聞き取り調査によって得られた情報によると、「この地域の炭焼窯はもともと金武から来た人たちが作った。その後恩納村の人たちもまねて炭焼窯を作ろうとしたがうまく出来なかった」という。

県内では炭焼窯の調査例が少なく比較検討することが難しいが、このような炭焼窯の報告例としては沖縄市獄山原の炭焼窯群、久米島町の炭焼窯群がある。

沖縄市では 1989 年から 1994 年に行われた緑地帯の小動物調査中に確認され、1997 年にこの内の７基について報告された（比屋根 1997）。ここでは河川の支流や本流沿いの緩やかな傾斜地低部や急斜面下部に、斜面を切り土して平坦面を設けて、窯体を築いている。窯体内の規模は大きなもので縦 2.5m、幅 2.6m、小さなもので縦 1.4m、幅 1.6m で、平面形は巾着形を呈している。恩納村の炭焼窯と比較すると、炭材が周りにあり、水の便が良く、林内の緩やかな傾斜地という立地状況は同じである。窯体の形状は、おそらく恩納村の洋ナシ形ないし扁平な洋ナシ形に相当すると推測される。規模は獄山原の小さいものに該当するものは確認されず、大きいとされるものも恩納村では中規模クラスのものにあたる。

久米島町では、島の中央に位置するだるま山（標高 202.6m）の麓にニブチの森と呼ばれる自然林が広がり、この林内に炭焼窯が点在している。今回、久米島自然文化センターの保久村昌欣氏のご協力を得て、確認することができた。久米島の炭焼窯は、緩やかな流れの沢に面する緩斜面上に、４基ほどを並べて築かれている。これが１グループを構成し、こうしたグループがいくつも存在しているようである。前面にある沢付近は、以前水田として利用されており、今も畦にあたる石積みが残っている。確認した１基の炭焼窯は天井の大部分が残存して、ほぼ完全な形を留めていた。正面には幅 0.6m、高さ 0.9m の焚口があり、焚口の上部から上と左右に 0.35m の幅を持った天井が設けられる。天井は正面から見ると周囲より山形に突き出ていて、上からみると楕円形に近く、規模は縦 3.0m、幅 2.5m、厚みは 0.2m である。外側全体は横幅 4.6m、窯体背面部の高さは約 1.8m、そこから中心部分に向けて 0.5m ほど緩やかに窪んでいる。窯体内の平面は楕円形に近く、焚口まで含めると縦 3.6m、幅 2.2m、中心付近の天井までの高さは 1.6m、焚口内部付近の高さは 1.2m である。窯体内壁全ては、被熱を受けて青灰色を呈し、煙道付近は非常に煤けて真っ黒である。窯体の形状は恩納村

の３地点に近いが、大きさは３地点と比べて一回り以上大きい。天井内側部分の観察では、恩納村の 17 地点で確認されたような一定方向に走る明瞭な凹凸はみられなかった。このすぐ隣に位置する炭焼窯は、天井を欠損しているが、窯体に石積みが一部残っている。規模は縦 4.0m、幅 4.6m である。この規模のものは恩納村では確認されなったが、久米島ではこの他にもいくつもあり、さらに大きなものも存在するという。恩納村のものと比較しても、立地条件や形状が大きく異ならないことから、当時の姿を推察する上で貴重な資料となる。

第２表は炭焼窯の観察一覧である。今回の調査はあくまで現状を確認するのみであり、伐採等も行っていないため、今後の詳細な調査によって煙道の仕組みや正確な規模等が判明すると思われる。

※　恩納村の炭焼窯と比較検討するために株式会社中部日本鉱業研究所の伊井浩一郎氏は、久米島の調査を独自で実施した。その成果については本文中にて紹介したとおりである。情報を提供していただいた氏に記して感謝申し上げる。

炭焼窯（１地点）

炭焼窯（２地点）

炭焼窯（３地点）

炭焼窯（４地点）

炭焼窯（５地点）

炭焼窯（６地点）

図版６　炭焼窯（１）

第２表　炭焼窯観察一覧

地　点	場　所	規　模 (cm)	焚口	煙道出口 (cm)	平面形	観　　察	付帯施設 (平坦面)		グリット
		縦　×　横	(cm)	縦　×　横			場　所	規　模（cm）	
1 地点	沢のすぐ脇	290　×　300	45	7　×　8	扁平洋なし	焚口には少量の石積。内部に焦げ痕。窯体前面と後方は切り土。			AB49
2 地点	沢のすぐ脇	310　×　260	30	6　×　8	楕円形	残存状態が良好な石積。内部に焦げ痕。窯体前面と背面は切り土。窯体前面に炭化材が残る。	沢の対岸	180　×　300	AD50
3 地点	沢から尾根の傾斜地	310　×　180	15	不明	楕円形	残存状態が良好な石積。内部に焦げ痕。窯体前面と背面は切り土。窯体前面に炭化材が残る。	窯体の後方	140　×　170	AF51
4 地点	沢から尾根の傾斜地	300　×　280	45	8　×　9	扁平洋なし	残存状態が良好な石積。内部に焦げ痕。窯体前面と背面は切り土。窯体前面の斜面に炭化材が残る。	窯体の前面	110　×　210	AF51
5 地点	沢のすぐ脇	260　×　200	60	9　×　10	洋なし	窯体前面と背面は切り土。焚口はほぼ埋まっている。	窯体の前面	170　×　120	AB46
6 地点	沢のすぐ脇	270　×　210	45	8　×　9	洋なし	窯体前面と背面は切り土。焚口には少量の石積。沖縄県教育委員会による生産遺跡分布調査で報告されいる (沖縄県教育委員会 1995)。	不明		AF46
7 地点	沢から尾根の傾斜地	290　×　240	30	不明	楕円形	内部に焦げ痕。窯体前面と背面は切り土。沢まで傾斜地に多量の炭化材が残る。	不明		AI46
8 地点	沢のすぐ脇	300　×　290	45	不明	扁平洋なし	焚口には少量の石積。窯体前面と背面は切り土。窯体内壁が大きく崩れる。沢までの傾斜地に多量の炭化材が残る。	不明		AH55
9 地点	沢のすぐ脇	300　×　250	40	10　×　10	扁平洋なし	焚口に少量の石積。内部に焦げ痕。前面と背面は切り土。平坦面には礫が確認できる。	沢の対岸	170　×　200	AF54
10 地点	沢のすぐ脇	250　×　170	40	6　×　4	扁平洋なし	焚口には少量の石積。窯体前面と背面は切り土。窯体前面に少量の炭化材が残る。	不明		AB53
11 地点	沢のすぐ脇	220　×　180	40	15　×　16	洋なし	焚口に少量の石積。内部に焦げ痕。窯体前面と背面は切り土。	不明		Y54
12 地点	沢のすぐ脇	210　×　150	40	5　×　6	洋なし	焚口に少量の石積。窯体前面と背面は切り土。	不明		Y55
13 地点	沢のすぐ脇	260　×　220	30	不明	楕円形	内部が崩れる。沢際に少量の炭化材が残る。	不明		AH49
14 地点	沢のすぐ脇	260　×　180	30	不明	洋なし	内部に焦げ痕。窯体前方の斜面に炭化材が残る。	不明		Z44
15 地点	沢と尾根の傾斜地	320　×　260	30	不明	洋なし	焚口には少量の石積。内部には焦げ痕。窯体前面と背面は切り土。	窯体の前面	200　×　240	Y42
16 地点	沢のすぐ脇	310　×　250	50	不明	扁平洋なし	焚口には少量の石積。内部がやや崩れる。窯体前面に少量の炭化材が残る。	不明		AD43
17 地点	沢のすぐ脇	330　×　250	40	不明	扁平洋なし	焚口には少量の石積。内部に焦げ痕。内壁と天井の接合部が一部残存する。天井の裏側は一定方向にはしる凹凸が残る。窯体前面と背面は切り土。	窯体の前面	200　×　300	W40
18 地点	沢のすぐ脇	270　×　260	40	不明	扁平洋なし	焚口には少量の石積。内壁や背面部が崩れる。窯体前面に少量の炭化材が残る。	不明		W38
19 地点	沢上の斜面	350　×　230	40	9　×　10	三角形	内部に焦げ痕。窯体前面と背面は切り土。窯体前面に少量の炭化材が残る。	不明		W35
20 地点	沢のすぐ脇	280　×　240	40	8　×　7	扁平洋なし	内部に焦げ痕。窯体前面と背面は切り土。窯体前面に少量の炭化材が残る。	沢の対岸	140　×　310	Z38
21 地点	沢と尾根の傾斜地	260　×　260	40	不明	扁平洋なし	窯体前面は切り土。	不明		W38
22 地点	沢のすぐ脇	310　×　260	40	8　×　8	扁平洋なし	焚口には少量の石積。内部には焦げ痕。窯体前面と背面は切り土。	不明		Y41
23 地点	沢と尾根の傾斜地	270　×　250	40	不明	洋なし	焚口には少量の石積。内部には焦げ痕。窯体前面に少量の炭化材。	不明		Z37
24 地点	沢のすぐ脇	260　×　280	50	不明	三角形	窯体前面と背面は切り土。	窯体の前面	140　×　180	AB40
25 地点	沢上の斜面	280　×　290	70	不明	三角形	焚口に少量の石積。内部に焦げ痕。窯体前面と背面は切り土。窯体前面には少量の炭化材が残る。	窯体の前面	170　×　40	AC25
26 地点	沢のすぐ脇	240　×　230	不明	不明	三角形？	残存状態が悪く、詳細は不明	不明		AD41
30 地点	沢上の斜面	280　×　290	35	不明	方形	内部には焦げ痕。窯体前面と背面は切り土。窯体前面に少量の炭化材が残る。	不明		U33
39 地点	沢のすぐ脇	240　×　180	50	不明	洋なし	焚口には石積。さらに、口は石積みで塞がれる。内部は多量の土が体積していることから、残存状態が良好と思われる。窯体前面は切り土で、石積みが残る。窯体前面には少量の炭化材が残る。	不明		Y46
40 地点	沢のすぐ脇	250　×　170	35	不明	洋なし	焚口は少量の石積。内部は焦げ痕と３条の溝が残る。窯体前面は焦げ痕。	不明		AA48
49 地点①	沢のすぐ脇	300　×　160	40	不明	長方形	マウンド状の地形に、窯体が二つ並んで築かれている。周辺に多量の炭化材が残る。	不明		AD36
49 地点②	沢のすぐ脇	330　×　170	40	不明	長方形		不明		AD37
54 地点	沢上の斜面	370　×　360	50	不明	洋なし	焚口は少量の石積。内部には焦げ痕。窯体前面と背面は切り土。	窯体の前面	100　×　250	AH38
55 地点	沢上の斜面	350　×　350	50	13　×　16	洋なし	焚口には石積。内部には焦げ痕。窯体前面と背面は切り土。窯体前面には少量の炭化材が残る。沢から窯までは石積みで階段を作る。	不明		AI39
58 地点	沢のすぐ脇	440　×　300	15	15　×　14	扁平洋なし	焚口には石積。内部には焦げ痕。窯体前面と背面は切り土。窯体前面に少量の炭化材が残る。	不明		AK43

炭焼窯（7 地点）

炭焼窯（8 地点）

炭焼窯（9 地点）

炭焼窯（10 地点）

炭焼窯（11 地点）

炭焼窯（12 地点）

炭焼窯（13 地点）

炭焼窯（14 地点）

図版７　炭焼窯（２）

炭焼窯（15 地点）

炭焼窯（16 地点）

炭焼窯（17 地点１）

炭焼窯 / 窯内天井部（17 地点２）

炭焼窯（18 地点）

炭焼窯（19 地点）

炭焼窯（20 地点）

炭焼窯（21 地点）

図版８　炭焼窯（３）

炭焼窯（22 地点１）

炭焼窯 / 窯内煙道（22 地点２）

炭焼窯 / 窯外煙道（22 地点３）

炭焼窯（23 地点）

炭焼窯（24 地点）

炭焼窯（25 地点）

炭焼窯（26 地点）

炭焼窯（30 地点）

図版９　炭焼窯（４）

炭焼窯（39 地点）

炭焼窯（40 地点）

炭焼窯（49 地点）

炭焼窯（54 地点）

炭焼窯（55 地点１）

炭焼窯（55 地点２）

炭焼窯 / 窯に続く石段（55 地点３）

炭焼窯（55 地点４）

図版 10　炭焼窯（５）

炭焼窯（58 地点１）

炭焼窯 / 窯外煙道（58 地点２）

図版 11　炭焼窯（６）

２. 猪垣

猪垣は、３地点（37 地点、62 地点、32 地点）として確認したが本来は１本のものと思われる。沖縄本島西海岸の猪垣は連続延長した長城型に構築するとされている (矢ヶ崎 1993)。確認した猪垣は総延長約 820m であった。

その形状は、谷の湿地を基点として（32 地点）、尾根を登って頂部に至り、そのまま細い尾根筋にそって走り、弧を描くように再び沢に向かって落ちていき（37 地点）、今度は尾根筋と直行するように再び尾根を登って頂部に至り、そのまま谷に向かって落ちていく（62 地点）。したがって、B 地区調査範範囲の境界とした内陸にまでたっする谷地を囲むように築かれている。

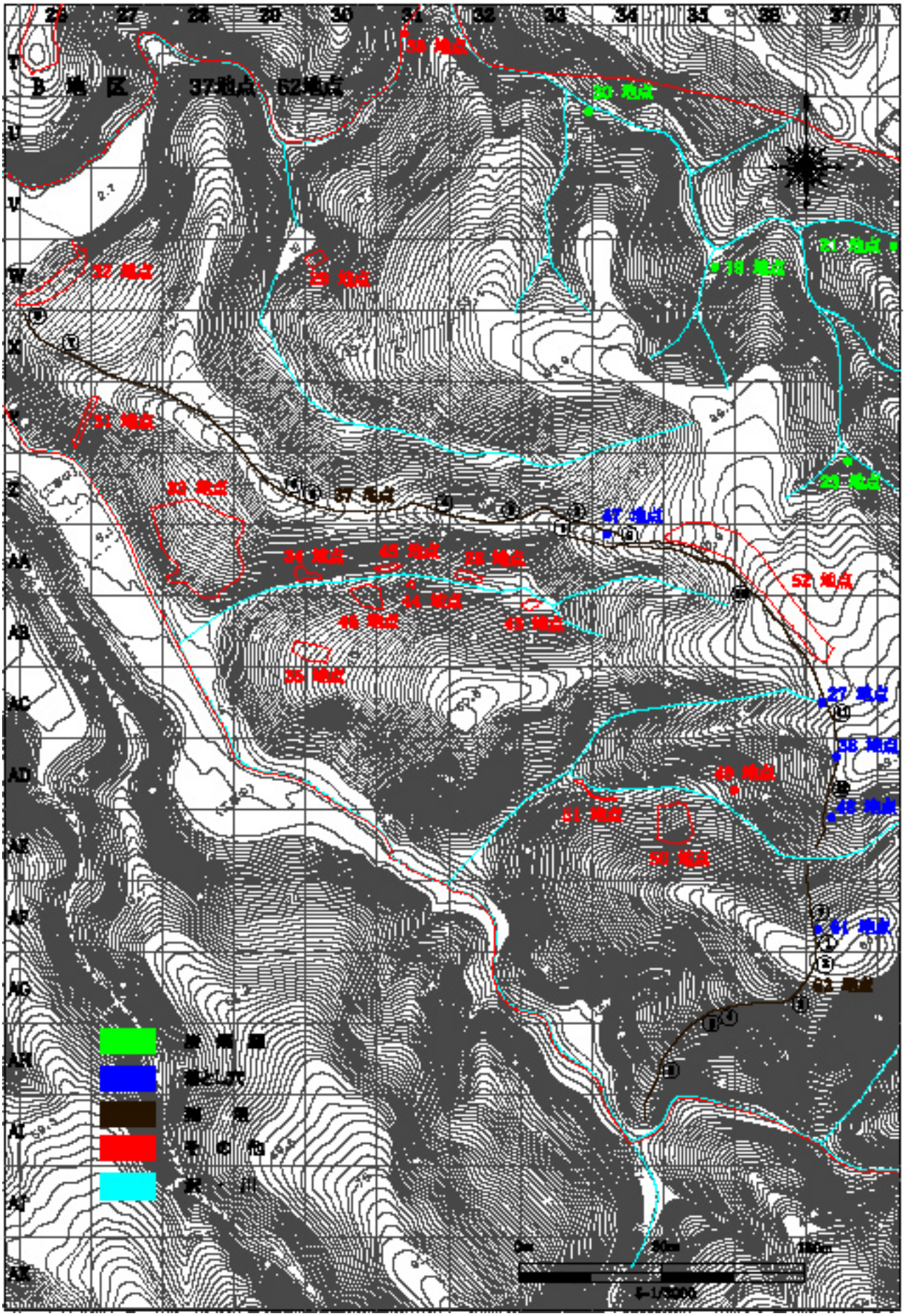
猪垣の報告例としては、1990 年より３年かけて実施された国頭郡大宜味村内の調査がある（宮城 1994）。今回の猪垣と比較すると、切り土や掘り切り、掘り出した土を外側に積み上げてできた土塁と平行に走る溝など共通点を見出すことができる。32 地点は盛土や切り土の上段にテーブル珊瑚を軒状に並べており、大宜味村で確認された尾根上の石塁や切り土の上段に石やテーブルサンゴを軒状に並べるものも、斜面中段に石を差し込むように積むといった構築方法と類似することから、猪垣の延長と判断した。他にも、踏査区内のいくつかでテーブルサンゴが土塁や切り土の上縁に並べられているものを確認している（33、41、49、50 地点等）。今後、この土塁が猪垣の役割を有するものなのか、まったくべつの用途を持つものなのか、今後、詳細に調査する必要があろう。

37 地点 (図版 12 ～１４)

B 地区 X26 ～ AE37 グリッドにかけて確認された猪垣である。全長は約 620m、痩せ尾根筋沿いに築かれ、32 地点付近まで続く。斜面の上り下りにあたる急斜面の南端は幅約 0.9m、深さ約 0.6m、断面 V 字形の溝のみがみられ、やや緩斜面の北端は高さ約 0.9~2.0m の切り土が施される。尾根の幅が広い部分では、深さ約 0.4 ～ 1.0m、幅 0.5 ～ 1.5m の溝とこれに平行して走る高さ 0.4 ～ 0.7m の土塁がみられる。痩せ尾根部分では、ほとんど高さ約 0.6 ～ 2.5m の切り土であるが、一部では深さ・幅とも約 0.5 ～ 1.0m の掘り切り状になっている。痩せ尾根の東端部分は、他の部分と異なり少なくとも２本の土塁が並走していることが確認できる。

猪垣①（37 地点１）

図版 12　猪垣（１）


B 地 区
37地点 62地点
30 地点
19 地点
21 地点
29 地点
32 地点
29 地点
51 地点
33 地点
37 地点
47 地点
34 地点
45 地点
28 地点
52 地点
34 地点
46 地点
43 地点
35 地点
27 地点
38 地点
40 地点
48 地点
51 地点
50 地点
61 地点
62 地点
0m
30m
180m
1/3000

第８図　猪垣の撮影地点

猪垣②（37 地点２）

猪垣③（37 地点３）

猪垣④（37 地点４）

猪垣⑤（37 地点５）

猪垣⑥（37 地点６）

猪垣⑦（37 地点７）

猪垣⑧（37 地点８）

猪垣⑨（37 地点９）

図版 13　猪垣（２）

猪垣⑩（37 地点 10）

猪垣⑪（37 地点 11）

猪垣⑫（37 地点 12）

猪垣（37 地点 13）

図版 14　猪垣（３）

62 地点 (図版 15)

B 地区 AE37 ～ AI34 グリッドにかけて確認された猪垣である。全長は約 200m あり、37 地点の南側端部にある沢の対岸から尾根を越えて大港川まで続いていることから、37 地点と連続したものと考える。尾根から沢への急斜面部分は、東側を高さ 0.5 ～ 2.0m ほどの切り土である。尾根付近の緩斜面部分は、深さ 0.2 ～ 0.3m の溝と掘り上げた土を外に積み上げた土塁がわずかに残っている。尾根上は、深さ 0.2 ～ 0.3 の溝とこれに平行して走る高さ 0.4 ～ 0.5m の土塁がみられる。土塁の上縁は雨水に洗われてかなりの丸みを帯びている。土塁の横には 61 地点の落とし穴が築かれている。遺物は確認されない。

32 地点 (図版 15 ～ 16)

B 地区 W25･26 グリッドで確認された猪垣である。湿地沿い傾斜地低部に位置する。斜面を高さ 1.8 ～ 2.0m ほど垂直に切り土して、その上縁にテーブルサンゴを並べている。上段の規模はテーブルサンゴ部分も含めて長さ約 90.0m、幅 4.0 ～ 5.0m である。平坦面の尾根側斜面には斜面にへばり付くような状態のテーブルサンゴをいくつもみられる。北東端には、深さ 2.4m 以上の落とし穴がある。穴口が直径 1.0m の円形を呈し、穴口縁にテーブルサンゴを並べて、ほぼ垂直に掘り下げられている。さらに、落とし穴の脇には湿地に方向に走る、長さ約 8.0m、幅約 0.6m、高さ約 0.6m、上縁にテーブルサンゴを並べた桟橋状の土塁が築かれている。37 地点・62 地点と異なり、尾根沿いに築かれたものではなく、前方の湿地と尾根の斜面を区画するように構築されていることから、性格の判断に迷ったが、南西端に 37 地点の猪垣、北東端には落とし穴がある点を考慮すると猪垣の可能性が高いと考えられる。今後の調査によって詳細な性格を検討する。

猪垣①（62 地点１）

猪垣②（62 地点２）

猪垣③（62 地点３）

猪垣④（62 地点４）

猪垣⑤（62 地点５）

猪垣⑥（62 地点６）

猪垣⑦（62 地点７）

猪垣⑤（32 地点１）

図版 15　猪垣（４）

猪垣⑦（32 地点２）

猪垣⑩（32 地点３）

図版 16　猪垣（５）

３.落とし穴

落とし穴は、ほとんど 37 地点と 62 地点の猪垣に沿って確認された。聞き取り調査においては、「深さ 2.5m 以上の穴を掘って猪を捕獲した」という話を得ている。大宜味村内の猪垣調査では 23 基を確認している。大宜味の落とし穴は、穴口の直径は平均 1.0m、円筒状に掘り下げられおり、多くの穴底には埋土が堆積しているが、調査時で深さ 3.0m を超えるものが 4 つ存在していた。また、2003 年から 2004 年にかけて実施された沖縄市池原の嘉手納弾薬庫内における文化財予備調査に伴う表面踏査においても、11 基のシシ穴（落とし穴）が確認されている。報告ではシシ穴の大きさと立地に相関関係あり、平面形が楕円形で深さのないものを 1 類、平面形は円形で、0.5m 程度の深さをもつものを 2 類と分類している。 1 類は長さ平均 1.4m と比較的に小さく斜面地に形成、 2 類は直径平均 1.925m と比較的に大きく尾根上など比較的に平坦な場所に形成するとされる（比嘉 2004）。

今回の踏査で落とし穴は猪垣沿いで 6 基、33 地点とした階段状平坦面で 3 基確認された。大部分の平面形は円形、穴口の直径平均は約 1.02m、深さ平均は 1.58m、円筒状に掘り下げられていて、最も深いものは現況で 2.4m であった。こうした恩納村内の落とし穴と大宜味、沖縄市の落とし穴と比較すると形状、規模の点から大宜味のものに近いことが判る。これは猪垣に伴っている点からも当然のことと思われるが、落とし穴の規模と立地に地域性がみられないか、周辺地域での調査結果と合わせて検討する必要がある。

27 地点（ 図版 17)

B 地区 AC37 グリッドで確認された落とし穴である。尾根上に築かれた猪垣（37 地点）の横に築かれている。穴口の規模は直径 1.0m の円形を呈し、ほぼ垂直に掘り下げられている。現況の深さは 1.7m であるが、穴壁の一部が崩れて穴底に堆積しているため、本来の深さはそれ以上とみられる。

落とし穴（27 地点）

落とし穴（38 地点）

図版 17　落とし穴（１）

38 地点 (図版 17)

B 地区 AD37 グリッドで確認された落とし穴である。27 地点から 37 地点の猪垣に沿って、31.5m 離れた尾根上に築かれている。穴口の規模は直径 1.0m の円形を呈し、現況の深さは 1.6m である。穴壁の一部は大きく崩れて広がっているが、本来はそれ以上の深さで円筒状に掘り下げられていたとみられる。

47 地点 (図版 18)

B 地区 AA34 グリッドで確認された落とし穴である。尾根上にある 37 地点の猪垣に沿って走る溝内に築かれる。穴口の規模は長軸 1.1m、短軸 1.0m の不整形だが、穴底は円形である。元々は円筒状に掘り下げられていたものが穴壁の一部が崩れたために、現在の形になったものと考えられる。現況の深さは 1.8m であるが、本来の深さはそれ以上とみられる。

48 地点 (図版 18)

B 地区 AE37 グリッドで確認された落とし穴である。38 地点から 37 地点の猪垣に沿って、34.2m 離れた尾根から沢への斜面上に築かれる。穴口の規模は長軸 1.4m、短軸 1.2m のやや楕円の形を呈し、現況の深さは 0.8m、円筒状に掘り下げられている。底面には黒褐色土がかなり堆積しているため、本来はそれ以上の深さであったとみられる。

61 地点 (図版 18)

B 地区 AF37 グリッドで確認された落とし穴である。落とし穴は尾根に築かれた猪垣 (62 地点) の横に築かれている。穴口の規模は直径 0.9m の円形を呈し、現況の深さは 1.2m である。穴壁の一部はかなり崩れて穴底に堆積しているが、本来はそれ以上の深さで円筒状に掘り下げられていたとみられる。

落とし穴（47 地点）

落とし穴（48 地点）

落とし穴（61 地点）

落とし穴（32 地点）

図版 18　落とし穴（2）

32 地点（図版 18）

前述した B 地区 W25・26 グリットの猪垣の北東端で確認された落とし穴である。深さ 2.4m 以上で穴口が直径 1.0m の円形を呈し、穴口縁にテーブルサンゴを並べて、ほぼ垂直に掘り下げられている。

33 地点（図版 19）

後述する階段状平坦面（33 地点）と伴に 3 基の落とし穴が、同一の土塁に沿って並んで確認された。それぞれ、西側からとすると、33 - 1 は長軸 1.8m ×短軸 1.0m、深さ 0.7m の楕円形を呈する。33 - 2 は長軸 1.2m ×短軸 1.0m、深さ 0.7m の楕円形を呈する。33 - 3 は直径 0.9m のほぼ円形を呈する。穴口や穴壁の一部が大きく崩れているため、本来の深さは不明であるが、短軸の長さから 27 地点の他に数地点で確認された落とし穴と同類の可能性も考えられる。

落とし穴（33 地点 1 ）

落とし穴（33 地点 2 ）

落とし穴（33 地点 3 ）

図版 19　落とし穴（ 3 ）

4. 平坦面

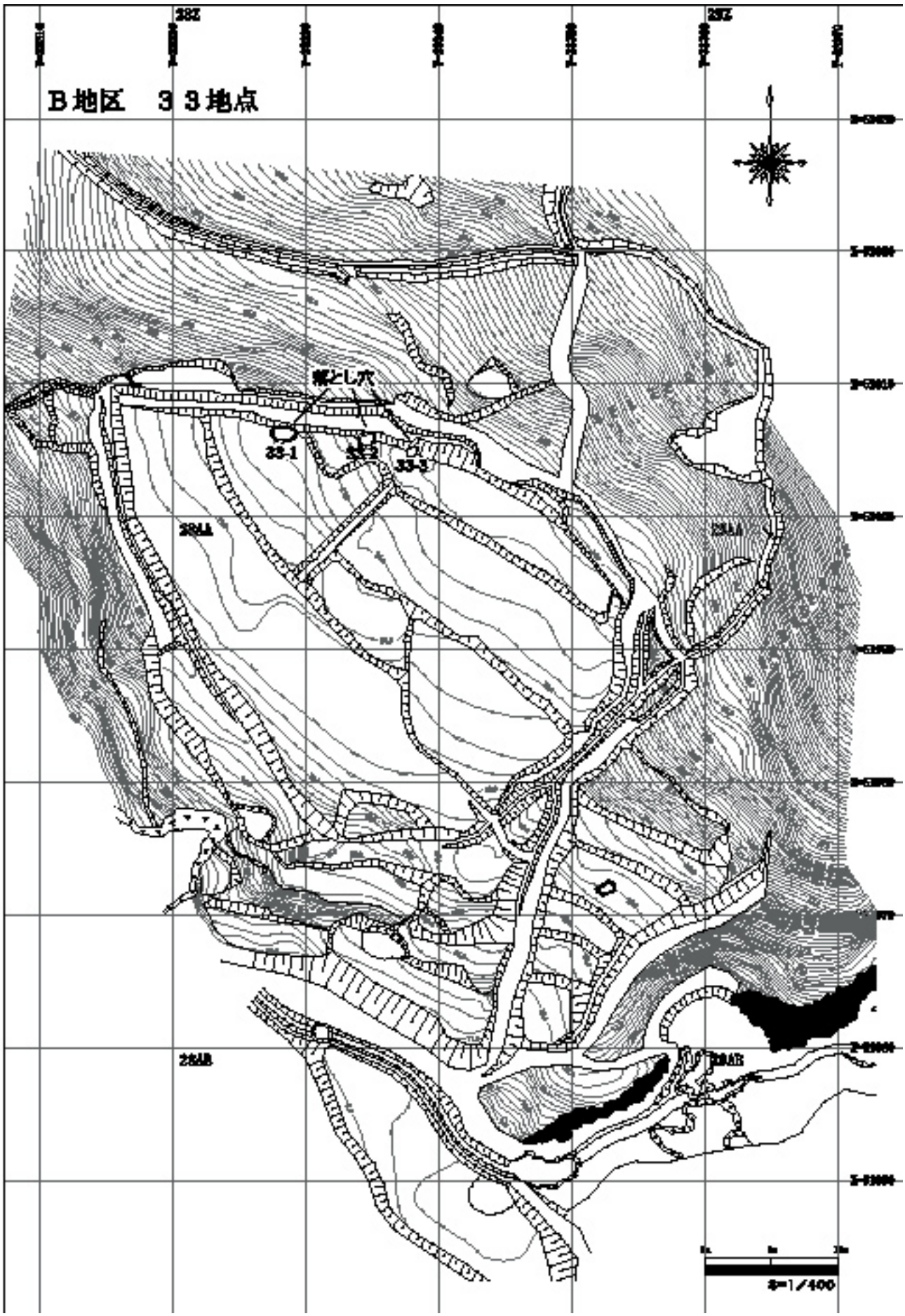
平坦面は、A. 階段状平坦面と B. 平坦面の 2 種類に分類した。その基準は平坦面が 1 段か複数段かで区別を行った。しかしながら、1 段の平坦面についても、本来階段状であったものが 1 段だけ残った可能性も考えることから、今後地点周辺の伐採等により詳細な地形を把握する必要がある。立地状況は全て沢沿いの斜面地に築かれおり、29 地点を除けば、みな 37 地点の猪垣がある尾根の南側に位置している。

性格は段々畑や作業場が想定される。聞き取り調査では、「斜面を削って階段状にした畑でイモを栽培していた」とか「筍を採るために竹を山に植えていた」と言う、山を生産の場所として活用していた頃の話を得られている。33 地点をはじめとする階段状平坦面の用途を検討する上で重要な証言であろう。

A. 階段状平坦面

33 地点 (第 9 図、図版 20~21)

B 地区 Z27 ～ AA29 グリッドにかけて確認された階段状平坦面である。尾根から沢への傾斜地に位置し、長軸約 53.0m、短軸約 42.0m の範囲に連続した平坦面が幾重もみられる。平坦面は沢から上へとのびる幅約 1.0m の小道を境に 2 区画に大きく区別できる。小道より東側の区画（以下、東区と仮称）には 6 段の平坦面があり、各段の規模は長軸約 4.4 ～ 12.0m、短軸約 2.0 ～ 4.0m、段差は約 0.6 ～ 1.0m、上段ほどその



第９図　階段状平坦面平面図

規模は大きくなる。東区の東側は、斜面を切り土した土を上に積み上げて、土塁を構築しており、その先は急な斜面を呈し、沢へ至る。小道より西側の区画（以下、西区と仮称）は、平坦面１つの大きさによって南側と北側に細別できる。南側は段差を設ける位置が前述の東側の区画とほぼ同じであることから、小道を挟んだひと続きの平坦面とみられる。北側は西区の大部分を占め、約５段の平坦面を確認できる。規模は長軸約 9.0 ～ 41.0m、短軸約 3.4 ～ 8.4m、段差は約 0.6 ～ 1.6m と大きさに幅がある。１段目から２段目の段差の上縁には、全長約 45m にわたってテーブルサンゴが並べられている。西区画の北側には、上縁にテーブルサンゴを伴った土塁が構築されている。前述したが、この土塁を伴った切り土に沿って３基の落とし穴が確認された。穴口や穴壁の一部が大きく崩れているため、本来の深さは不明であるが、短軸の長さから、他に数地点で確認された落とし穴と同類の可能性も考えられる。遺物はシャコガイを確認したのみである。

当地点は、斜面を切り土して構築された段々畑に近い形状を呈しているが、複雑に入り組んだ平坦面のほか、平坦面の外側にあたる斜面上部には 33 地点全体を囲うかのような高さ約 0.6m の切り土や浅い溝とこれに平行して走る土塁が確認できることから、現時点ではその性格は不明である。その規模や性格も後述する他の階段状平坦面が単純な構造を呈しているのに対し、複雑な構造で広範囲にわたっている点で大きく異なる。今後の詳細な調査によって再確認する必要がある。

35 地点（図版 21）

B 地区 AB29・30 グリッドで確認された階段状平坦面である。尾根から沢への傾斜地に位置し、長軸 20.0m、短軸 10.0m の範囲に連続した 4 つの平坦面がみられる。各平坦面の大きさは長さ 4.0 ～ 5.6m、段差約 0.6m である。遺物は確認されない。

46 地点（図版 21）

B 地区 AA30 ～ AB31 グリッドにかけて確認された階段状平坦面である。尾根から沢への傾斜地に位置し、長軸 15.8m、短軸 14.2m の範囲に連続した 4 つの平坦面がみられる。さらに各段は横軸方向にも約 0.6m の段差が設けられている。規模は南 - 北方向にそれぞれ 1 段目が約 4.0m、２段目は約 3.0m、３段目と 4 段目は 2.0 ～ 2.5m である。各段の段差は沢と 1 段目が約 2.3m、1 段目と 2 段目は約 1.5m、2 段目と 3 段目は 1.3 ～ 2.5m、3 段目と 4 段目は 2.5 ～ 3.0m である。東側の切り土の上部には、高さ約 0.2m の低い土塁がある。遺物は確認されない。

50 地点（図版 21）

B 地区 AD34 ～ AE35 グリッドにかけて確認された階段状平坦面である。尾根から沢への傾斜地に位置し、長軸約 23.0m、短軸約 19.0m の範囲に連続した 4 つの平坦面がみられる。規模は 1 段目が南 - 北方向に約 9.0m、２段目は約 5.0m、３段目と 4 段目は約 2.0m である。各段の段差は沢と 1 段目が約 1.0m、その他の段は 2.0 ～ 2.6m ほどである。1 段目の北東端には高さ 0.2 ～ 0.5m ほどの石積みと少量のテーブルサンゴを確認できる。また、テーブルサンゴは沢の対岸にもいくつかみられる。４段目の上縁には、長さ約 8.0m にわたって礫が並んでいる。遺物は確認されない。

階段状平坦面 / テーブル珊瑚が貼付（33 地点１）

階段状平坦面 / 測量風景（33 地点２）

図版 20　階段状平坦面（１）

階段状平坦面 / 遠景（33 地点 3）

階段状平坦面（33 地点 4）

階段状平坦面（33 地点 5）

階段状平坦面 / 法面にシャコガイ（33 地点 6）

階段状平坦面 / 陶器（33 地点 7）

階段状平坦面（35 地点）

階段状平坦面（46 地点）

階段状平坦面（50 地点）

図版 21　階段状平坦面（2）

B. 平坦面

28 地点（図版 22）

B 地区 AA32 グリッドで確認された平坦面である。沢沿いの斜面を沢から高さ 1.4m 付近で縦 1.7 ～ 3.2m、横約 14.0m の範囲で切り土を行い、３つに区画された平坦な空間を設けている。西側平坦部の規模は縦約 3.2m、横約 5.6m、中央平坦部は縦約 1.7m、横約 4.6m、東側平坦部は縦約 2.7m、横約 4.4m である。石積みは主に、西側平坦部と中央平坦部を仕切る壁の上段や両平坦部の沢側斜面の端部にみられる。遺物はシャコガイとクモガイが確認された。

29 地点（図版 22）

B 地区 W30 グリッドで確認された平坦面である。沢沿いの緩斜面部分に位置し、縦約 9.0m、横約 13.0m の範囲で周囲と比べて 0.6m ほど窪んでいる。窪みの東側上面には、石積みが施されているようにもみられる。遺物は確認されない。

34 地点（図版 22）

B 地区 AA29・30 グリッドで確認された平坦面である。平坦面は、沢沿いの斜面を沢から高さ 2.0m 付近で縦約 3.5m、横約 15.0m の範囲で切り土して、その上段には石積みを施している。また西半分側には縦約 2.3m、横約 7.0m の 2 段目が築かれる。1 段目の中央部分には、山側から沢側に向かって幅約 0.2m、深さ約 0.15m、周囲を石で囲んだ排水溝のような溝が設けられる。遺物は昭和初期に愛媛県の砥部町で焼かれた磁器と思われるスンカンマカイ等の陶磁器片が数点確認できた。

43 地点（図版 22）

B 地区 AB33 グリッドで確認された平坦面である。沢沿いの斜面を沢から高さ約 0.5m の所で斜面を縦約 3.9m、横約 7.7m の範囲で切り土して築かれている。切り土の上段や平坦な部分に石積みはみられない。ガラス瓶以外に遺物は確認されない。

44 地点（図版 22）

B 地区 AA31 グリッドで確認された平坦面である。沢沿いの斜面を沢から高さ 2.3m 付近で縦約 2.5m、横約 4.2m の半円状に切り土して築かれている。切り土の上段や平坦な部分に石積みはみられない。遺物は確認されない。

45 地点（図版 22）

B 地区 AA30･31 グリッドで確認された平坦面である。沢沿いの斜面を沢から高さ 1.4m 付近で縦約 2.3m、横約 11.7m の範囲で切り土して築かれている。東端から横幅約 5.2m の部分は約 0.4m 高く、段違いになっている。切り土の上段や平坦な部分に石積みはみられない。遺物は確認されない。

51 地点（図版 22）

B 地区 AD33・34 グリッドで確認された平坦面である。沢沿いの斜面を高さ 1.0 ～ 1.2m ほど垂直に切り土して、その上段に石を高さ 0.3m ほど積み上げている。上段の幅は石積み部分も含めて約 1.2m、全体の長さは約 30.0m である。沢沿いに平行してある点は 32 地点の猪垣と類似する。また、大宜味村では切り土の上に石を積み上げる猪垣もみられる（宮城 1995）。51 地点の遺構は全体の長さが比較的に短く、また今回確認された猪垣と直接結びつかないことから猪垣と区別したが、なお、猪垣の可能性もある。また、古道の可能性も指摘できよう。

平坦面（28 地点）

平坦面（29 地点）

平坦面（34 地点１）

平坦面 / 砥部焼碗（34 地点２）

平坦面（43 地点）

平坦面（44 地点）

平坦面（45 地点）

平坦面（51 地点）

図版 22　平坦面

5. 畝状遺構

畝状遺構はB地区の47地点猪垣の東側、比較的幅がある尾根上で2箇所確認された。腐葉土が多量に体積しており、一見すると畝に見えないが、よく見ると溝のようなものが数条あることがわかる。その範囲を確定するため、尾根の頂部付近から斜面に向かって何度も往復した。また、落ち葉等を拾い集める清掃を行って確認した。

52地点（図版23）

B地区AA35～AB37グリッドにかけて確認された畝状地形である。尾根上に位置し、長軸113.4m、短軸13.4mの範囲で北西-南東方向に、37地点の猪垣と並行して走る溝がみられる。溝の大きさは、幅約0.9m、深さ約0.2～0.6m、断面形はU字形である。溝と溝の間は、幅約1.8～2.7mでやや盛り上がり、平面形は帯状畝のような形を呈する。今回の踏査では、表面的な観察に留まったため、明瞭な3条の溝を中心に範囲として捉えている。したがって、今後の調査において範囲が拡大される可能性は高い。遺物は確認されない。

53地点（図版23）

B地区AC38～AD40グリッドにかけて確認された畝状地形である。尾根上に位置し、長軸77.1m、短軸9.1mの範囲で西－東方向に走る溝がみられる。溝の大きさは、幅0.5～0.8m、深さ0.2～0.4m、断面形はU字形である。溝と溝の間は幅1.0～4.0mでやや盛り上がり、平面形は帯状畝のような形を呈する。今回の踏査では、表面的な観察に留まったため、今後の調査によっては範囲が拡大する可能性もありうる。遺物は確認されない。

畝状遺構（52地点1）

畝状遺構（52地点2）

畝状遺構 / 作業風景（52地点3）

畝状遺構（53地点）

図版23　畝状遺構

６. マウンド状遺構

59 地点（図版 24）

B 地区 AD40 グリッドで確認された大規模なマウンド状遺構である。尾根上の 53 地点の東端に位置し、２つのマウンドが確認された。両方とも規模は長軸約 4.0m、短軸約 3.6、高さ約 1.1m、平面形は方形に近い。遺物は確認されない。

7. 石列遺構

56 地点（図版 24 ～ 25）

B 地区 AI39 グリッドで確認された石列遺構である。岩盤が露出した細い尾根から沢への傾斜地際に位置し、２基並んで確認された。それぞれ方形と楕円形状に石が列をなして囲んでいる。方形を 56 - 1、楕円形を 56 - 2 とする。また、石は列をなすだけでなく、何段かに積み上げている場所もある。

方形は縦約 5.6m、横約 4.2m、斜面側の一辺以外は高さ 0.3 ～ 0.4m ほど石を積み上げている。囲い内側の中央付近にはテーブル状の巨石が１つあり、周囲より１円、５円、10 円硬貨をいくつか確認した。

楕円形は長軸約 4.9m、短軸約 3.0m、高さ約 0.2m である。方形と楕円形の間隔は約 1.0m あり、現在の 100 円硬貨を１点確認した。

これら石積みに使用された礫は、斜面上部に露出している岩盤の一部が崩落したものとみられる。２箇所の石積みも含めて周辺を表面清掃したが、これ以外に人為的なものを確認できなかった。遺物は硬貨以外にはみられない。ちなみに、当該地点は拝みの対象ともなっており、現在も行われている。聞き取りをした結果、彼らが積み並べたものではないと言う。

マウンド状遺構（59 地点１）

マウンド状遺構（59 地点２）

マウンド状遺構（59 地点３）

石列遺構（56 地点１）

図版 24　マウンド状遺構、石列遺構

石列遺構（56 地点２）

石列遺構（56 地点３）

石列遺構（56 地点４）

石列遺構（56 地点５）

図版 25　石列遺構

８. 堀り切り状遺構

31 地点（図版 26）

B 地区 Y26・27 グリッドで確認された掘り切り状遺構である。尾根の頂部から沢へ向かって、ほぼ直線状の溝を掘っている。沢から尾根へはかなりきつい斜面となっている。溝は長さ約 42.0m、幅 2.5 ～ 3.5m、深さ 2.0 ～ 3.0m、断面形は V 字形である。溝を造る際に切り取った土は、外側に積み上げられ溝が広くなり、掘り切り状になっている。同じ尾根上に 37 地点の猪垣が築かれていることから、猪垣の一部である可能性も考えられる。遺物は確認されない。

９. テーブル珊瑚集積

36 地点（図版 26）

B 地区 T31 グリッドで確認されたテーブル珊瑚の集積である。テーブルサンゴは沢際の斜面や沢の対岸、7m 下流の沢際にみられる。ほとんどが長軸 0.7m、短軸 0.5m 程度で、同一の大きさである。それらは明らかに人為的に持ち込まれたものであるが、配置の規則性もみられず、その目的は不明である。また、周辺にはテーブルサンゴを用いた人工物やテーブルサンゴ自体を確認することはできなかった。

10. 石積遺構

57 地点（図版 26）

B 地区 AI40 グリッドで確認された石積みである。沢のすぐ傍に位置し、長軸 3.4m、短軸 2.0m、高さ約 0.2 ～ 0.5m、平面形は不整形である。礫を小さなマウンド状に人為的に積み上げているようにみえる。遺物は確認されない。

掘り切り状遺構（31 地点１）

掘り切り状遺構（31 地点２）

掘り切り状遺構（31 地点３）

掘り切り状遺構遠景（31 地点４）

テーブル珊瑚集積（36 地点）

石積遺構（57 地点）

図版 26　掘り切り状遺構、テーブル珊瑚集積、石積遺構

11. 溝状遺構

60 地点（図版 27）

B 地区 AD39・40、AE40 グリッドで確認された溝状地形である。溝は尾根上に築かれており、幅 1.2 ～ 1.6m、深さは 0.4 ～ 0.8m、長さは約 60m におよぶ。溝の断面は U 字形に掘られているが、掘り上げた土を外側に積み上げた痕跡は確認できない。溝が比較的に短く、確認された猪垣と直接的に結びつかないために猪垣とは区別したが、なお、猪垣の一部である可能性もある。

溝状遺構（60 地点）

図版 27　溝状遺構

12. グスク

41 地点（図版 28）

B 地区外にあたる R26 ～ T26 グリッドにかけて確認されたグスクである。グスク研究所の當眞嗣一氏に現場確認をしてもらい、助言をいただいた。

B 地区東側の境界線である沖積地沿いの尾根先端部にある。B 地区調査範囲の外にあるが、B 地区で確認された猪垣との関連を調べるために踏査した結果、発見された。尾根の地形に合わせて「く」の字形を呈する。頂部に平坦面を設け、周囲を削平し場所によっては土塁を築く。尾根の斜面には不整合な平坦面を複数削りだす。頂部平坦面の尾根側境界からは山側の尾根筋に向かって、尾根の両端を掘削することで細い通路状を呈する。當眞嗣一氏によれば「按司の居城等ではないが、防備の意識を持って構築されたグスクである。」という。当該地点は、草木の繁茂が著しく今回の調査では平坦面や切り土の構築状況を十分に把握することは困難であった。今後充分に調査・研究される必要がある。

13. 古墓

42 地点（図版 28）

C 地区 AO21 グリッドで確認された古墓である。シリン川沿いの斜面に築かれている。墓口は幅 0.5m、高さ約 1.1m にて、内部の規模は奥行 2.6m、幅約 1.3m のやや楕円の形を呈する。天井の 2/3 ほどは崩れ落ち、墓室内部に溜まっている。このために内部底面の観察は困難であるが、壁面は人為的に掘り込まれたことを判読できる。しかし、周囲で厨子甕（ずしがめ）（蔵骨器）等の遺物は確認されなかった。

グスク / グスク遠景（41 地点 1）

グスク / 法面に貼付されたテーブル珊瑚（41 地点 2）

グスク / 帯曲輪（41 地点 3）

グスク / 集石・石弾？（41 地点 4）

古墓 /C 地区の古墓（42 地点）

図版 28　グスク、古墓

第３表　各地点座標一覧

単位：m

地点名	遺構名	測点	X座標	Y座標	Z座標
1地点	炭焼窯	1	51956.088	34166.194	64.550
2地点		1	51864.762	34235.526	75.068
3地点		1	51794.738	34244.501	92.226
4地点		1	51769.860	34248.258	88.042
5地点		1	51942.445	34069.004	70.391
6地点		1	51799.120	34029.563	73.860
7地点		1	51671.810	34077.308	81.469
8地点		1	51698.595	34407.363	107.985
9地点		1	51767.509	34388.349	91.656
10地点		1	51951.071	34339.451	70.949
11地点		1	52070.024	34389.915	67.320
12地点		1	52067.989	34423.782	69.098
13地点		1	51702.080	34190.133	83.523
14地点		1	52000.892	33985.181	62.959
15地点		1	52077.224	33909.148	56.586
16地点		1	51871.499	33953.660	78.561
17地点		1	52126.825	33814.972	43.049
18地点		1	52152.482	33752.111	36.316
19地点		1	52144.466	33629.286	23.448
20地点		1	52010.040	33754.857	51.844
21地点		1	52156.226	33731.594	38.482
22地点		1	52041.148	33861.577	36.651
23地点		1	52035.594	33703.754	48.484
24地点		1	51939.314	33813.735	66.432
25地点		1	51905.499	33822.610	73.334
26地点		1	51857.836	33846.309	88.103
27地点	落とし穴	1	51900.266	33689.404	74.575
28地点	平坦面	1	51971.670	33483.350	—
		2	51974.610	33485.950	—
		3	51973.580	33491.090	—
		4	51970.230	33499.430	—
		5	51967.550	33497.660	—
		6	51967.910	33495.160	—
		7	51969.870	33492.620	—
		8	51969.280	33488.500	—
		9	51969.560	33485.130	—
29地点	平坦面	1	52149.390	33399.460	—
		2	52154.310	33408.190	—
		3	52149.130	33411.860	—
		4	52143.500	33403.650	—
30地点	炭焼窯	1	52231.503	33558.248	19.332
31地点	掘切状遺構	1	52072.100	33280.818	—
		2	52070.660	33283.450	—
		3	52061.630	33279.130	—
		4	52055.900	33276.400	—
		5	52050.280	33274.150	—
		6	52046.360	33273.270	—
		7	52043.710	33270.510	—
		8	52046.948	33269.427	—
		9	52049.590	33271.193	—
		10	52053.290	33272.248	—
		11	52057.959	33274.541	—
		12	52061.923	33275.598	—
		13	52066.063	33277.979	—
32地点	猪垣	1	52158.620	33268.970	—
		2	52153.820	33275.100	—
		3	52155.130	33276.140	—
		4	52150.640	33277.050	—
		5	52141.250	33275.240	—
		6	52131.670	33265.600	—
		7	52124.400	33252.390	—
		8	52123.110	33246.390	—
		9	52123.130	33237.550	—
		10	52124.660	33237.180	—
		11	52126.270	33238.790	—
		12	52129.170	33242.050	—
		13	52129.570	33243.810	—
		14	52132.520	33251.900	—
		15	52136.140	33253.910	—
		16	52137.230	33256.790	—
		17	52140.700	33260.670	—
		18	52150.820	33273.120	—
		19	52158.200	33268.570	—
	落とし穴①				
33地点	階段状平坦面	1	52009.300	33313.460	—
		2	52014.220	33336.020	—
		3	52010.890	33344.650	—
		4	52006.790	33351.270	—
		5	52004.040	33358.470	—
		6	52002.290	33364.910	—
		7	51995.870	33364.790	—
		8	51989.630	33360.720	—
		9	51976.360	33365.290	—
		10	51971.520	33363.750	—
		11	51969.060	33361.520	—
		12	51963.780	33354.130	—
		13	51959.630	33350.560	—
33地点	階段状平坦面	14	51959.030	33342.410	—
		15	51967.180	33332.540	—
		16	51967.820	33323.620	—
		17	51971.020	33321.810	—
		18	51973.010	33327.500	—
		19	51978.390	33328.000	—
		20	51981.810	33323.170	—
		21	51987.320	33319.100	—
		22	51992.890	33317.870	—
	落とし穴①				
	落とし穴②				
	落とし穴③				
34地点	平坦面	1	51968.960	33395.410	—
		2	51972.820	33393.700	—
		3	51975.840	33394.870	—
		4	51977.130	33396.850	—
		5	51976.930	33398.640	—
		6	51973.400	33400.920	—
		7	51972.040	33408.270	—
		8	51969.520	33408.650	—
		9	51969.450	33401.270	—
35地点	階段状平坦面	1	51934.720	33394.100	—
		2	51933.140	33403.340	—
		3	51929.980	33414.180	—
		4	51922.740	33411.200	—
		5	51923.720	33401.670	—
		6	51929.260	33392.100	—
36地点	テーブル珊瑚集積	1	52275.549	33454.987	7.991
37地点	猪垣	1	52119.059	33241.927	—
		2	52113.269	33243.705	—
		3	52104.234	33250.185	—
		4	52098.258	33261.309	—
		5	52095.421	33267.742	—
		6	52090.453	33278.425	—
		7	52084.999	33287.724	—
		8	52082.340	33294.680	—
		9	52078.721	33306.952	—
		10	52076.975	33314.901	—
		11	52069.070	33329.808	—
		12	52060.999	33344.603	—
		13	52053.840	33352.161	—
		14	52045.587	33361.063	—
		15	52034.467	33369.086	—
		16	52024.238	33378.356	—
		17	52016.242	33390.433	—
		18	52016.802	33391.152	—
		19	52011.198	33403.387	—
		20	52007.459	33417.200	—
		21	52007.078	33425.954	—
		22	52007.048	33435.381	—
		23	52007.901	33445.355	—
		24	52008.860	33453.155	—
		25	52011.217	33456.782	—
		26	52011.609	33461.823	—
		27	52009.493	33468.788	—
		28	52005.418	33480.284	—
		29	52002.000	33499.072	—
		30	52000.952	33508.779	—
		31	52003.791	33520.871	—
		32	52010.070	33533.589	—
		33	52001.658	33548.219	—
		34	52000.012	33562.305	—
		35	51997.797	33562.966	—
		36	51996.764	33570.598	—
		37	51992.845	33578.138	—
		38	51990.136	33580.906	—
		39	51989.210	33587.427	—
		40	51990.724	33595.455	—
		41	51989.049	33605.954	—
		42	51987.546	33615.636	—
		43	51980.826	33625.974	—
		44	51976.747	33634.548	—
		45	51972.046	33640.750	—
		46	51968.574	33643.919	—
		47	51963.237	33648.792	—
		48	51957.864	33654.888	—
		49	51947.442	33662.235	—
		50	51943.869	33667.132	—
		51	51935.965	33670.953	—
		52	51930.554	33676.133	—
		53	51924.280	33681.343	—
		54	51911.961	33686.816	—
		55	51903.132	33690.344	—
		56	51890.050	33695.894	—
		57	51875.498	33698.367	—
		58	51869.537	33698.787	—
		59	51862.560	33697.025	—

第３表　各地点座標一覧

単位：m

地点名	遺構名	測点	X 座標	Y 座標	Z 座標
37 地点	猪　垣	60	51854.518	33693.634	－
		61	51849.940	33692.974	－
		62	51834.687	33689.654	－
		63	51829.633	33690.746	－
		64	51828.206	33691.019	－
		65	51821.333	33687.016	－
		66	51818.998	33685.205	－
		67	51993.385	33547.615	－
		68	51989.761	33561.596	－
		69	51986.763	33571.513	－
		70	51989.391	33576.749	－
		71	51987.810	33582.776	－
		72	51987.408	33591.069	－
		73	51986.469	33598.081	－
		74	51986.199	33606.354	－
		75	51984.960	33610.918	－
		76	51979.777	33620.891	－
		77	51978.574	33626.183	－
		78	51978.988	33634.140	－
		79	51975.022	33639.401	－
38 地点	落とし穴	1	51869.212	33697.586	79.438
39 地点	炭焼窯	1	52059.794	34073.378	57.717
40 地点	炭焼窯	1	51991.271	34121.730	62.416
41 地点	グスク	1	52329.575	33252.790	－
		2	52329.501	33260.154	－
		3	52327.634	33270.453	－
		4	52329.096	33282.098	－
		5	52325.982	33289.484	－
		6	52322.609	33297.279	－
		7	52319.052	33307.472	－
		8	52311.299	33305.497	－
		9	52307.684	33293.047	－
		10	52308.164	33277.674	－
		11	52305.689	33272.565	－
		12	52302.977	33267.396	－
		13	52294.377	33264.514	－
		14	52286.055	33261.121	－
		15	52273.245	33257.966	－
		16	52267.496	33261.244	－
		17	52259.075	33260.825	－
		18	52253.141	33246.195	－
		19	52266.076	33239.133	－
		20	52275.899	33242.879	－
		21	52286.197	33245.829	－
		22	52298.734	33250.937	－
42 地点	古墓	1	51404.397	33073.875	55.837
43 地点	平坦面	1	51955.000	33520.990	－
		2	51957.420	33524.810	－
		3	51958.420	33527.220	－
		4	51956.480	33531.990	－
		5	51954.070	33529.150	－
		6	51951.520	33525.630	－
44 地点	平坦面	1	51965.140	33456.300	－
		2	51966.440	33456.370	－
		3	51968.040	33457.920	－
		4	51968.410	33459.110	－
		5	51967.520	33460.070	－
		6	51965.750	33460.860	－
		7	51964.930	33460.000	－
45 地点	平坦面	1	51974.970	33438.620	－
		2	51976.040	33439.000	－
		3	51977.950	33449.540	－
		4	51977.010	33453.810	－
		5	51975.340	33449.780	－
		6	51973.430	33444.420	－
46 地点	階段状平坦面	1	51963.460	33424.440	－
		2	51966.320	33434.510	－
		3	51964.920	33440.950	－
		4	51953.160	33443.230	－
		5	51953.570	33432.490	－
		6	51958.130	33428.490	－
47 地点	落とし穴	1	51994.648	33568.604	58.532
48 地点	落とし穴	1	51835.722	33694.538	71.983
49 地点	炭焼窯① 炭焼窯②	1	51850.990	33640.187	38.966
50 地点	階段状平坦面	1	51841.826	33596.878	－
		2	51842.160	33602.335	－
		3	51844.082	33608.257	－
		4	51843.389	33612.867	－
		5	51836.758	33614.922	－
		6	51831.328	33616.289	－
		7	51826.226	33617.143	－
		8	51823.039	33615.029	－
		9	51821.066	33610.386	－
		10	51821.485	33604.858	－
		11	51824.037	33596.671	－
		12	51826.230	33597.767	－

地点名	遺構名	測点	X 座標	Y 座標	Z 座標
51 地点	平坦面	1	51857.218	33549.866	－
		2	51857.010	33552.341	－
		3	51856.639	33554.939	－
		4	51850.693	33558.107	－
		5	51847.330	33562.338	－
		6	51846.035	33570.274	－
		7	51847.140	33571.804	－
		8	51846.668	33574.565	－
		9	51845.830	33574.365	－
		10	51845.024	33566.491	
		11	51848.616	33558.817	
		12	51855.041	33555.229	
		13	51855.567	33551.530	－
52 地点	畝状遺構	1	51991.558	33360.193	－
		2	51994.181	33602.148	－
		3	52000.863	33613.222	－
		4	52000.827	33626.273	－
		5	51995.075	33642.818	－
		6	51984.680	33654.116	－
		7	51975.826	33660.436	－
		8	51965.349	33667.659	－
		9	51950.296	33679.193	－
		10	51936.818	33688.992	－
		11	51930.532	33696.032	－
		12	51923.478	33692.021	－
		13	51923.818	33689.274	－
		14	51926.683	33684.915	－
		15	51932.907	33680.206	－
		16	51943.846	33671.909	－
		17	51949.150	33666.761	－
		18	51960.436	33658.277	－
		19	51970.615	33647.510	－
		20	51981.167	33638.164	－
		21	51986.757	33622.737	－
		22	51988.934	33615.826	－
		23	51990.654	33606.367	－
53 地点	畝状遺構	1	51881.900	33740.887	－
		2	51882.588	33757.479	－
		3	51885.697	33774.953	－
		4	51887.005	33787.104	－
		5	51885.404	33793.872	－
		6	51879.574	33805.018	－
		7	51872.199	33817.332	－
		8	51868.930	33814.810	－
		9	51876.348	33794.178	－
		10	51875.657	33787.656	－
		11	51878.286	33784.385	－
		12	51878.623	33778.838	－
		13	51874.971	33762.141	－
		14	51879.897	33742.913	－
		15	51881.658	33740.789	－
54 地点	炭焼窯	1	51704.537	33744.854	37.098
55 地点	炭焼窯	1	51670.603	33776.278	35.207
56 地点	石列遺構① 石列遺構②	1	51644.562	33772.649	40.536
57 地点	石積遺構	1	51650.154	33807.517	41.791
58 地点	炭焼窯	1	51599.706	33926.154	68.505
59 地点	マウンド状遺構	1	51862.425	33814.911	88.336
60 地点	溝状遺構	1	51864.935	33784.354	－
		2	51860.012	33796.223	－
		3	51856.140	33803.668	－
		4	51850.892	33809.055	－
		5	51842.995	33819.315	－
		6	51836.886	33826.403	－
		7	51833.045	33834.381	－
61 地点	落とし穴	1	51772.974	33686.831	71.458
62 地点	猪　垣	1	51808.836	33681.320	－
		2	51800.967	33680.794	－
		3	51794.146	33681.845	－
		4	51776.833	33683.420	－
		5	51764.241	33686.571	－
		6	51752.699	33684.996	－
		7	51743.753	33680.270	－
		8	51733.261	33671.343	－
		9	51732.212	33666.617	－
		10	51732.212	33659.266	－
		11	51730.638	33642.988	－
		12	51727.490	33628.286	－
		13	51718.571	33614.633	－
		14	51709.653	33606.757	－
		15	51699.159	33599.406	－
		16	51689.191	33597.305	－
		17	51676.600	33590.479	－
		18	51667.156	33590.479	－

第５章　まとめ

今回の調査は沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設に先立って、予定地内の埋蔵文化財の分布状況を明らかにするために実施した。平成 16 年度は表面踏査を中心に行い、平成 17 年度は表面踏査の成果を受けて試掘調査を実施する予定である。

建設予定地の総面積は約 222.1ha と広大であり、すべてを網羅することは時間的に困難であったため、重点的に開発が検討されている地域を中心として表面踏査を行った。調査区を海側のＡ地区、丘陵北側をＢ地区、丘陵南側をＣ地区に分割した。調査方法としては、表面踏査によって建設予定地一帯に広がる植物等の貴重種を損傷しないよう充分考慮するため、概要踏査と詳細踏査の２段階に分けて実施する方法をとった。概要踏査では植物の伐採を行わず、鬱蒼と茂る草木を手で掻き分けつつ、丘陵内の環境や遺構の確認を行う。詳細踏査では確認された遺構の再確認及び同様の立地を重点的に踏査し、遺構の観察を実施した。また、遺構が存在する可能性が高いが落葉によって表面が観察できない場合は、表面清掃を実施した。確認された遺構については、GPS とトータルステーションを併用して座標を取得し、写真撮影を行った。

表面踏査の結果、Ａ地区では遺構は確認できず、Ｂ地区では 61 地点 68 箇所の遺構が確認され、Ｃ地区では１地点１箇所の遺構が確認された。以下、それぞれの遺構についてまとめ、今後の調査における資料としたい。

１.炭焼窯

Ｂ地区の丘陵間に流れる沢沿いで 34 箇所確認された。沢のすぐ脇に作られるものや丘陵の斜面に作られるものがあり、詳しく観察するとその形態も様々である。保存状態としては久米島の例のように天井が完全に残るものはないが、一部が残存しているものは確認された。煙道が残っているものは多い。聞き取り調査では金武町からやっていた人々が窯を構築し、炭を生産していたらしい。

炭焼窯は現在では使用されていないため、いずれその技術が失われていくものである。形態や立地も様々なことから、今後は聞き取り調査をさらに行い民俗事例との比較検討をしつつ、後世に残す手段を講ずる必要があると考えられる。

２.猪垣

Ｂ地区の丘陵尾根沿いで長大な猪垣が１本確認された。総延長は 820m に及ぶ。37・62・32 地点として記録したが、最終的に同一の目的をもって築造された１本の猪垣と判断できた。海沿いの沖積地を基点として尾根を登って頂部に至り、尾根筋に沿うように造られており、いくつかの谷を降りて再び登り、最終的に再び丘陵の奥まで伸びる狭い沖積地に到達する。一定の地域を囲むように構築されている。すべて同じ造りではなく、場所によって高い盛土をする場所や尾根を削平して壁を作る場所などがある。また、この猪垣にそって深い落とし穴が６箇所確認された。

今後は総合的な実測図の作成やいくつかのトレンチを設定して断面の観察を行うなど、構築方法等についてさらに詳細な調査を実施する必要がある。また、Ｂ地区の調査範囲の制限によって、この猪垣がさらに沖積地の向かい側の尾根に続いていくのかは調査していないため、不明である。今後さらに追調査を実施して確認する必要がある。

３.落とし穴

落とし穴は猪垣沿いで６箇所、33 地点とした階段状平坦面で３箇所確認された。猪垣沿いで確認された落とし穴はまぎれもなく猪を落とす役割を担う目的で設置されたと考えられる。階段状平坦面で確認された３箇所については距離も目視で確認できるほど接近しているため、詳細な性格は不明である。今回は落とし穴として報告したが、別の性格をもつものかもしれない。

今後はそれぞれの測量等の調査を実施することが必要となる。

4. 平坦面

丘陵の斜面を平らに削平することで平場を作っている遺構が 11 箇所確認された。これには、階段状に何段も平坦面を作るもの（4 箇所）と、1 段のみで区画を有するもの（7 箇所）等がある。その性格も様々で、段々畑として利用されたものや、作業場として利用されたもの、古道として利用されたもの等があると考えられるが、詳細な検討をすることは現段階では難しい。

今後は広範囲にわたって構築されている遺構もあることから、伐採等を実施しつつ詳細な範囲を把握する必要がある。また、清掃や試掘調査、詳細な測量を実施することによってその性格が明らかになることもあろうかと考えられる。

5. 畝状遺構

B 地区の尾根沿いで 2 箇所確認された。ちょうど猪垣が確認された尾根沿いでかなり隣接している。これが畑遺構であるならば、猪垣との関係が極めて高いものと考えられる。
表面踏査によって確認できた畝状遺構の範囲をおさえたが、落ち葉等の堆積によって確認できない場所も存在すると思われ、今後は伐採や清掃を実施してさらに詳細な範囲と形態を調査する必要がある。

6. マウンド状遺構

B 地区の畝状遺構に隣接して土盛のマウンドが 2 箇所確認された。何のためにこのようなマウンドを作ったのか不明であり、今後は聞き取り調査や民俗事例等の検証によって確認する必要がある。

7. 石列遺構

B 地区の岩盤が露出した細い尾根の中腹で石列遺構が 2 基確認された。石を円形に配列しており、場所によっては 2 段か 3 段に積んでいる。近くには綺麗な沢が流れており、石列遺構を含む周辺は特定団体の聖域ともなっているようである。性格は不明であり今後は試掘調査及び測量を実施する必要がある。

8. 掘り切り状遺構

猪垣が確認された尾根頂部から、B 地区西側境界の沖積地に向かって尾根を縦に切った遺構が確認された。猪垣と関係があるとも考えられるが、詳細は不明である。猪垣と合わせて測量を実施する必要がある。

9. テーブル珊瑚集積

B 地区の沢沿いで確認された。現在ではなかなか海底で確認できない大きなテーブル珊瑚を集積している。斜面を削平し平坦面を作る遺構ではテーブル珊瑚が並べられているものも確認されており、それに利用しようとしてストックしたものとも考えられるが､詳細な関係については不明である。今後は伐採･清掃を実施し、記録写真を残しておく必要がある。

10. 石積遺構

B 地区沢のすぐ脇で確認された。礫を小さなマウンド状に積み上げており、目的・用途は不明である。今後は伐採・清掃を実施し、記録写真を残しておく必要がある。

11. 溝状遺構

B 地区の猪垣・畝状遺構・マウンド状遺構に隣接して確認された溝である。畝状遺構の何本かの畝がある訳ではなく、直線的に溝が掘られている。今後は伐採・清掃を実施して詳細な範囲を調査する必要がある。

12. グスク

B 地区海岸沿いの沖積地先端部に延びた尾根で確認された。當眞嗣一氏に現地での確認を依頼し、共に踏査を実施した。明瞭な石積みは現段階では確認できなかったが、頂部は削平し平坦面を設ける。尾根の斜面にはいくつもの平場を作る。伐木が生い茂り詳細な形態を調査することができなかったため、今後は伐採等を行い、詳細な踏査や測量を実施する必要がある。

13. 古墓

C 地区で唯一確認された遺構である。丘陵斜面に構築されており、墓室内は天井が崩れている。表面観察では厨子等の遺物が確認できなかったため、すでに空墓となっているものと考えられる。今後は崩落した土砂を除去し、詳細な調査を実施する必要がある。

以上、今回確認された遺構の概要をまとめた。平成 17 年度の調査は試掘調査を中心に実施、表面踏査では確認できなかった埋蔵文化財の分布状況を把握する必要がある。試掘坑の設定場所については、今回の踏査によって大よその検討をつけることが可能となった。今後の開発計画に合わせ重要な場所について実施する。また、今回確認された遺構についても、詳細な遺構範囲が確認できなかった平坦面や畝状遺構、猪垣等について伐採や清掃を実施して、その規模を把握する予定である。

＜引用・参考文献＞

大宜味村教育委員会　1994『大宜味村の猪垣 - 猪垣調査報告書 -』

仲松　弥秀　1980「第二章 村の自然」『恩納村誌』　恩納村役場

名瀬市教育委員会　2001『奄美大島名瀬市グスク詳細分布調査報告書』

比嘉　清和　2004「沖縄市池原で確認されたシシ穴の概要について」『あやみや』
沖縄市立郷土博物館紀要 13 号　沖縄市立郷土博物館

比屋根　満　1997「獄山原の炭窯群について」『あやみや』沖縄市立郷土博物館紀要 5 号
沖縄市立郷土博物館

矢ヶ崎　孝雄　1992「沖縄県下の猪垣（一）」『文教大学教育学部紀要』26

矢ヶ崎　孝雄　1993「沖縄県下の猪垣（二）」『文教大学教育学部紀要』27

恩納村教育委員会　1994『恩納村の文化財』恩納村教育委員会

當眞　嗣一　1983「山田グスク」『沖縄グスク分布調査報告書―沖縄本島及び周辺離島―』
沖縄県文化財調査報告書 第 53 集　沖縄県教育委員会

岸本　義彦ほか　1991『北部リゾート地区遺跡分布調査報告』沖縄県文化財調査報告書 第 99 集
沖縄県教育委員会

岸本　義彦ほか　1995『生産遺跡分布調査（Ⅰ）―県内生産遺跡分布調査報告―』
沖縄県文化財調査報告書 第 119 集　沖縄県教育委員会

沖縄県教育委員会　1983『伊武部貝塚発掘調査報告書国道 58 号線拡幅工事に伴う緊急発掘調査―遺構・貝製品・石器・貝殻編―』沖縄県文化財調査報告書 第 51 集
沖縄県教育委員会

沖縄県教育委員会　1995「第 4 章調査の内容」『生産遺跡分布調査（Ⅰ）―県内生産遺跡分布調査報告―』
沖縄県文化財調査報告書 第 119 集

報 告 書 抄 録

ふりがな	おきなわかがくぎじゅつだいがくいんだいがく（かしょう）けんせつよていちないのいせき
書名	沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地内の遺跡（Ⅰ）
副書名	埋蔵文化財予備調査（表面踏査）報告
巻次	－
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第３１集
編著者名	片桐千亜紀、崎原恒寿
発行機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所在地	沖縄県西原町字上原１９３－７
発行年月日	２００５年（平成17）５月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （ｈａ）	調査原因
おきなわかがくぎじゅつだい 沖縄科学技術大 がくいんだいがく(かしょう) 学院大学（仮称） けんせつよていちないの 建設予定地内の いせき 遺跡	おきなわけんおんな 沖縄県恩納 そんたんちゃ 村谷茶・ みなみおんな 南恩納	473111				H17.2.1 ～ H17.5.20	124.4 ha	埋蔵文化財の分布状況を把握するための予備調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
沖縄科学技術大学院大学（仮称）建設予定地内の遺跡	生産遺跡	グスク時代 ～ 近世、近代	炭焼窯、猪垣、落とし穴、平坦面、畝状遺構、マウンド状遺構、石列遺構、掘り切り状遺構、テーブル珊瑚集積、石積遺構、溝状遺構、グスク、古墓等		表面踏査によって多数の遺構が確認された。 （計６２地点、６９箇所）

要約	本報告書は、文部科学省より委託を受け、沖縄科学技術大学院大学 (仮称) 建設予定地内における埋蔵文化財の分布状況を明らかにするために実施した、表面踏査の結果をまとめたものである。調査地域は沖縄県恩納村字南恩納・谷茶にまたがる。調査の結果、62 地点、69 箇所の様々な遺構が確認された。主な遺構として炭焼窯、猪垣、落とし穴、平坦面、畝状遺構、マウンド状遺構、石列遺構、掘り切り状遺構、テーブル珊瑚集積、石積遺構、溝状遺構、グスク、古墓等がある。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 31 集

沖縄技術大学院大学（仮称）建設予定地内の遺跡（Ⅰ）

－埋蔵文化財予備調査（表面踏査）報告－

発　行　年　2005 年（平成 17）5 月 31 日
編集・発行　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒 903 － 0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193 番地の 7
℡　０９８（８３５）８７５１
印　　刷　株式会社　近代美術
〒 901 － 1111　沖縄県南風原町字兼城 206
℡０９８（８８９）４１１３

ⓒ沖縄県立埋蔵文化財センター　2005　printed in japan
許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。